ヴェーユ感受性研究②

Étude sur la sensibilité de WEIL

村 上 吉 男

Yoshio MURAKAMI

I

前著や前号(1)にも触れおいたことだが、ヴェーユはたとえば、ユダヤ教とキリスト教、異端、異教の各思想を、古代ギリシアと西ローマ帝国崩壊から、彼女の生きていた時代までの、主に自然科学に関する諸思想を、また彼女の生きていた時代かそれ以前かの、サルトル、ボーヴォワールやマルクスをはじめとした同輩先輩諸氏の案出する諸思想をば、博覧強記をもってか否かは別にして、少なからず知的誠実さの姿勢保持のもとに学び、かつ新聞や雑誌などへの投稿で批評していた（しかし彼女が直接サルトルの思想を批評することはなかった）と。

ところで筆者をして、ヴェーユが生きていた時代で学んだ諸思想を批評すると語らせ得るは、当の諸思想を批評できるほどの諸思想が彼女になくてはならぬことを示唆させる。そこではしかし、彼女が同輩先輩諸氏の諸思想に、自らに確信させた諸思想で対応し、その諸思想を根拠に批評すると述べたとはいえ、筆者はいわば諸氏とした他人と彼女との両方に用いる「諸思想」という表記を相異させる謂で捉えおかざるを得なくなる。要は前者でいう「諸思想」はすでにこの世界で産出された、周知のそれであり、後者はこの世界に受け入れられるかどうかはともかくも、前者に代えて、ヴェーユも含め誰しもに独自に打ち出されよう「諸思想」であることを含意させる。

筆者にいう「諸思想」とはヴェーユの場合、上記中の、たとえばイエス・キリストやマルクスの先輩諸氏による各思想を併せいう諸思想の表記と同意にみ

てよかろうが、しかし相異をみせるとすれば、彼女一人でもって、この先輩諸氏の諸思想のそれぞれに対し、彼女独自といえる諸思想で答え得た、その諸思想をさす表記でしかないのであって、それ以外のことではもはやない。したがって彼女が諸氏の思想の、つまり上記の例でいうキリスト教思想やマルクス主義思想の一一の思想に関係しては、独自の思想を打ち立てたといわれたりするからか、彼女にみる「諸思想」には宗教思想や社会思想も窺えると指摘できるし、彼女に周知のごとき、宗教思想家や社会思想家という各肩書相貌が付いて回ることになったと思えるわけである。

ここで前段に記しおいたことを以下のごとくに、要はヴェーユが宗教思想や社会思想に代表させていい得る諸思想の持主であったためか、彼女には宗教思想家や社会思想家とみなされるだけでなしに、その他のさまざまな肩書相貌がまとわり付いていたと捉えられるは、いわば古代から彼女の生きていた時代までの、彼女に取り上げられた、先輩同輩諸氏の諸思想に対する、多くの批評が彼女独自の諸思想に基づいて成ったところに起因しようと再度まとめたうえで、しからば筆者は彼女が先輩同輩諸氏の諸思想の、その数に匹敵する、彼女独自の諸思想をもって対応していたと、換言すると先輩同輩諸氏の諸思想に対するに、彼女の生み出す独自の諸思想がいかに扱われるとみることができるのかに即答えるべきだが、その前に、次のことが付け加えられねばならないのである。

上記した諸思想という表現を別の語句にしていえば、先輩同輩諸氏に窺える諸思想のと同様に、ヴェーユ独自の諸思想の一一も個別の思想に相当するのであり、しかしてこの個別の思想には、彼女の独自に用いる単語から意味される思想ならびに各異なる単語を複数以上組合わせることで意味される思想が含まれて成るであろう。先輩同輩諸氏による諸思想のことはここでは彼女の場合に倣わせ得るから省かれるにしろ、たとえば彼女の、ある作品（論文）での諸思想の一一が部分的、断片的に、要は完璧ではなく見出されてこようが、かかる部分的、断片的思想が何らかの個別の思想に与すると見定め得るならば、それぞれを取り出し網羅させてみては何らかの個別の思想に当てはめる分類が、換言するとこれも上記の例の宗教思想や社会思想（これらは各個別の思想である）のおのおのに、あるいは他の肩書相貌で語られる各思想に割り当て得る分類が可能になろうし、筆者はこうした同じ作業をば、前号の拙論で整理した全表の、

なかでも（Ⅲ）表の年代順にあらわした各作品に課す必要があろう。つまり作品すべてに対する作業を通して、彼女の独自に用いる、何らかの単語で成ったり、また各異なる単語を複数以上組合わせて形成させたりした、個別の思想の出所（初出）がどの作品にあるか分からず、さらにこの個別の思想が後出の作品にみつかるのか、そこでいかに変わるか否かをたどらず、果たして筆者にとって、この個別の思想さえあるといえるかが明らかにされ得ないのだ。

前段最後（「つまり」と記した以下）の文章はその通りであるといわねばなるまい。なぜかは、疾うにヴェーユが諸思想の持主であると見て取れたがゆえに、諸思想をしてこの個別の思想を複数以上のそれで構成せしめる表記になるからだと。したがって諸思想を組立てたとみては、その言換えたる（語）個別の思想には、「彼女の独自に用いる単語」から、たとえば〈malheur（不幸）〉〈Vertu（力）〉〈sensibilité（感受性）〉などから各意味される思想が見受けられると繰返し確認できる。だが筆者は、ここでは、この〈不幸〉〈力〉と〈感受性〉の単語（から意味される思想）のそれぞれについて語るのではなく、これらの「単語から意味される思想」がむろんその「各異なる単語を複数以上組合せ形成させた個別の思想」に該当することを、さらにこれらの単語のうち、〈不幸〉と〈力〉の各単語を例にして、かかる「個別の思想」が具体的に何をさすか問う際、〈力〉には〈Vertu〉のほか、〈pesanteur〉〈pouvoir〉や〈puissance〉があるとされるなかで、これらを一に〈Vertu〉〈pesanteur〉と一に〈pouvoir〉〈puissance〉との各集まりに区分けし、各集まりの〈力〉に〈不幸〉を組合わせてみれば、筆者自らが思うに、前者の集まりをして宗教思想に、後者のそれをして社会思想にかかわっていわせよう各個別の思想を成り立たせることを述べおきたいのだ。要は彼女が既存の、正統キリスト教思想やマルクス主義思想のおのおのに、自らのみた〈不幸〉と〈力〉の各個別の思想を取り入れては、正統キリスト教思想やマルクス主義思想であり得ない宗教思想や社会思想をあらわしたことにある。

そこで、たとえば〈不幸〉がヴェーユに特有な単語の一として使われていたかを今一度確認しておくと、特有な単語の一に、要は彼女独自の単語すなわち術語の一に位置づけられるは、前号でまとめた表のうち、入手不可能だった（Ⅰ）表や（Ⅱ）表でのことはともかく、（Ⅲ）表や（Ⅳ）表の多くの作品に散見さ

れることに、もしくは〈不幸〉の単語が前面に出され加えられてはじめて、彼女による宗教思想や社会思想たる各個別の思想さえも成り立たせることにあったといわざるを得ないからである(2)。ここでその〈不幸〉の単語をみつけるに、筆者は〈不幸〉の単語を初出させる作品や後出の作品から、とどのつまり彼女の全作品（しかし（Ⅲ）表や（Ⅳ）表の各作品にかぎられる）を見渡しては、このすべてから選び網羅し、宗教思想、社会思想やその他という各個別の思想に分類することが課せられなければならぬとはすでに一見したところである。

さすれば問題は筆者に、〈不幸〉の単語が少なくも宗教思想や社会思想（たる各個別の思想）に用いられたといわせると、このいずれかの個別の思想において、〈不幸〉の単語（の中身）が何かしら変化（変容）するなどとみてかまわぬのかどうかにあろう。換言すると宗教思想や社会思想にあって、〈不幸〉の単語（の中身）に異同がみられるか否かを問うことになろう。筆者にとっては、各個別の思想における〈不幸〉の単語（の中身）は同じでない、つまり異なると答えるほかなくなる。要は〈不幸〉の単語から意味される思想（個別の思想）が宗教思想や社会思想（たる各個別の思想）に対して同じ中身であるとすれば、「その他」までを含めた、複数の個別の思想は必要でないにちがいない。逆の見方にしていうと、ヴェーユは「諸思想（多くの個別の思想）の持主」ゆえに、〈不幸〉の単語が諸思想に亘る、その中身は同じであり得ない。そこに立ち得るならば、たとえばこの〈不幸〉の単語で、諸思想（宗教思想、社会思想やその他という、多くの個別の思想）間は関係すると受け取ることができよう。しかし筆者は〈不幸〉の単語では、諸思想間はそのすべての間で関係することがないとみる。なぜなら筆者が先きに取り上げていた、彼女独自のと記す、この〈不幸〉、〈力〉や〈感受性〉なる各単語において、なるほど〈不幸〉は科学わけても人文科学や社会科学に当てはめられるをよしとする単語であり、その中身になろうが、しかし〈不幸〉は科学とりわけ自然科学に適当されよう単語とはみなされないからである。かつ筆者にいえるは、彼女が宗教や社会に関して問い起稿した諸論文以外で、その批評対象にし得た科学（論文）のほとんどは、「その他」という、個別の思想に位置づけられる自然科学である。繰返しになるが、この自然科学には〈不幸〉（の単語やその中身）はかかわることがない。

それでは、ほかである〈力〉の単語（の中身）はどうか。諸思想（宗教思想、社会思想やその他という、多くの個別の思想）間で、この〈力〉における変化（変容）が見受けられるかである。〈力〉には疾うに指摘した通り、宗教思想での〈pesanteur〉や〈Vertu〉が、社会思想での〈pouvoir〉や〈puissance〉が各用いられているごとくにみえる（かかる〈力〉の分け方は筆者によっており、むろん例外もあるといわねばならない。たとえば社会思想の本文上記の単語（原語）が宗教思想中で使用される場合であるが、それでも宗教思想の同本文上記の単語（原語）が社会思想中に使われるという逆の場合はみられない）。このように、〈力〉の単語（原語）は複数あるのだから、この単語（原語）ごとに区別され得るといえるだけか、その単語（原語）の意味に従われて、こうした中身に当初から他との変化（変容）を抱えさせると捉えられる。だから〈力〉の単語（原語）は宗教思想や社会思想たる各個別の思想に使用されることに、要は〈力〉の単語（原語）は人文科学や社会科学に利用されてかまわぬことになる。しかし自然科学にあっては、彼女がタレス以降の自然科学史について、そのなかで質された数学（幾何学など）や物理学について批評すれども、筆者に、〈力〉自体を問いあらわすとみえるはずの力学は彼女の生きていた当時の現代（自然）科学での量子力学や波動力学が語られるだけであり、これを除いて彼女に言及されることがないように思われるのだ。したがって力学とした場合の単語（原語）は〈mécanique〉であり、この単語やその中身（意味）でしか使われないからして、これを上記単語（原語）に置き換えて用いることはできなくなる。要するに彼女が使う〈力〉には上記単語（原語）が諸思想に使用されても、これらに共通しよう中身（意味）を有する単語（原語）は見当たらないということである。

実はヴェーユは〈力〉の単語（原語）に、さらに〈force〉を用い、この〈force〉をも人文科学、社会科学や自然科学の諸思想に各与させ、およそ〈力〉の中身（意味）を担わせて使用するとともに、そのほかに、〈force〉をして人間の〈能力〉の語意を付加せしめるとみえるからして、筆者は今この意味で捉えることにし、こうした〈能力〉に、彼女独自の単語として取り上げおいた〈不幸〉や〈力〉以外の〈感受性〉を当てはめ得るといえるのだ。そしてここでは、かかる〈能力〉〈感受性〉こそ宗教思想、社会思想やその他の一である（自然）科

学という、多くの個別の思想を成り立たせる、そのすべてに共通してみられると、かつ〈感受性〉の単語（の中身）は上記した、それぞれの個別の思想において、異なりをみせると記すだけにとどめおかざるを得ない。なれどこの〈感受性〉のことをばこれから筆者なりに説くにしても、せめて異なりが、要は変化（変容）が何より宗教思想や社会思想のどちらに窺われるかを見定める必要があろう。そのためにはここでもとりあえず以下が確認されてしかるべきことになろう。

ヴェーユは1925年アンリ四世高等中学校（lycée Henri Ⅳ）に入学、そこでかの哲学者である哲学教師アランに師事し、事実（現実）を自らに直視できる体験を経ないでは、知的誠実さの、または不可知論の姿勢を貫かねばならぬとの、アランの教えをこの学生時代から明らかに守り通しつつ、さらなる進学先きの高等師範学校（École Normale Supérieure）を1931年に終えると同時に、高等中学校（lycée）以上の教授資格（agrégation）を取得して、同年10月lycéeの哲学教師に赴任以来、アランのかかる教えが実現されたとみることができる（アランの教えと同様に、ヴェーユの両親も本文上記中の、こうした「姿勢」を持つことの大切さを彼女の幼少時代から、彼女に教え身につけさせていたとすれば、筆者はここでは、その教えを前記した〈思惟と行動との関係〉に置換させ、この〈関係〉を体験である〈行動（感受性）〉から〈思惟（知性）〉への関係として捉え得よう、その証左にしたいと思う以上に、〈思惟と行動との関係〉を〈行動（体験）〉の原動力なる〈感受性〉を主題にして説こうとするわけである。〈感受性〉は筆者には彼女が生きるに欠かせない能力にみえるのであり、体験である〈行動（感受性）〉から〈思惟（知性）〉への関係については、本文で後述して証明するが、しかし体験はすでに、学士論文《デカルトにおける科学と知覚（Science et perception dans DESCARTES）》（1930年）を、さらに教師時代での労働組合運動やパリ脱出後滞在した南フランスでの農民哲学者ティボンとの農作業に関する諸論文を脱稿投稿する以前に済ませられていたとみる）。すなわち1934年の工場（女工）体験は、さらに工場（女工）体験での疲労を癒すべく、ポルトガル旅行に出掛けては、キリスト教を奴隷の宗教と見知る、1935年の、最初のキリスト教体験はそれぞれ、両年を境にして、《工場日記（Journal d'Usine）》などをはじめとする、体験を踏まえた〈思惟〉の

駆使によって、彼女独自の、境以前よりもさらに深き社会思想の、かつ境以後からの宗教思想の打ち出しに繋らせたとおおよそにいい得るのだ。したがって以上から知るように、筆者は彼女の諸思想の打ち出しにあっては、まず社会思想そして宗教思想の順次でしかないことを、一方彼女に指摘された〈思惟と行動との関係〉にあっては、繰返すが、この〈関係〉は〈行動（感受性）〉から〈思惟（知性）〉へのかかわりに、だから〈思惟（知性）〉は現実（世界）が〈行動（運動（身体次に魂の各動き））〉すなわち〈感受性〉で捉えられるままを記す〈手段として〉しか役立たないかかわりにならざるを得ないことを証すと断じ得たわけであり、〈感受性〉の単語（の中身）は宗教思想において、その変化（変容）をみせること、要は諸思想（多くの個別の思想）間に語られる〈感受性〉は今取り上げている、社会思想よりか宗教思想で、しかも社会思想に用いられる〈感受性〉の中身（意味）をもとにしての、さらなる展開を示すこと、これについてはすでに前著で触れたということである（なお彼女にいう、〈感受性〉と現代（自然）科学との関係がどうなるかは次号以降に譲るほかないと断わりおく）。

してみると、ヴェーユの質す社会思想や宗教思想のいずれにもともに使われる〈感受性〉には一貫性もしくは整合性がなくてはならぬ単語であると受け取ることができる。疾うに一見したごとく、彼女独自の単語としたなかでの、〈不幸〉の単語は彼女が自然科学に関して作り上げた、個別の思想の対象に与しはしなかったし、〈力〉の単語の方は複数の単語で上記の各個別の思想にあらわれていたからして、〈力〉の一単語が諸思想（多くの個別の思想）に共通して用いられるのでもなかった。だから〈不幸〉や〈力〉の各単語には、単語自体やその中身に一貫性もしくは整合性が見当たらないといわねばならぬわけである。しかしこと〈感受性〉の単語だけにかぎらせていうと、前段で述べた通り、〈感受性〉はどの個別の思想に対し、この同じ単語を使用しつつも、一単語にてその中身（意味）を膨らませ（変化（変容）させ）て理解される能力になってくるのだ。つまり筆者はここから、彼女の独自に用いる〈感受性〉の単語から意味される思想こそ〈一貫性〉を有しているとヴェーユ研究者の何人かが指摘ずる[3]ことに同意せずにおれなくなる。換言すると、〈感受性〉の単語から意味される思想はそれ自身個別の思想に充当するだけでなく、〈感受性〉がたとえば社会科学（分野）では当時の資本主義、社会主義共産主義、全体主義の

各政治・経済・(労働) 社会の基に、人文科学 (分野) では神話、歴史 (古代ユダヤ (イスラエル) やローマ (帝国)、中世南フランスや近代以降のフランス)、古代ギリシアの自然学者たちやプラトンをはじめとする哲学者たち、教育全般、宗教の基に、そして自然科学 (分野) では古代ギリシアから現代に至る科学 (数学 (幾何学)、物理学の個別科学)、かつこうした科学史の基に立つように取り入れられることによって、社会思想、宗教思想や科学思想 (個別の思想) のそれぞれが問われもしたと筆者に捉えられるのだ。だから三分野における、この各個別の思想さえ彼女独自の思想であるといえるわけだが、しかし独自の思想をかたちづくるところの〈感受性〉はわたしたち読者によって、彼女に窺える社会思想や宗教思想がほぼ明らかになったと指摘されるごとく、すでに語られた思想であるとみることができるのかである。

なるほど筆者を含めた、わたしたち読者は、ないしはヴェーユ研究者は、ヴェーユが生涯社会科学を筆頭にする、三分野に跨がって、厖大な数量にのぼる作品 (論文や書簡などの一一を作品とみなす) を書き残すのを知っているからして、かかる作品に表明されよう思想は単語から意味される思想 (彼女独自に打ち出す〈不幸〉〈力〉〈感受性〉なる各単語以外での、たとえば彼女に同じく用いられる〈抑圧〉〈革命〉などをもさす個別の思想という謂の一) も含め多いといわねばならぬ一方、これも彼女の独自に作り上げた諸思想 (ここは単語を複数以上組合わせて成る、多くの個別の思想の謂) を彼女の全作品からすべて取り出した、要は語りつくしたとみてかまわぬかである。否。わたしたち読者は、ないしはヴェーユ研究者は、上記していた、例の社会思想や宗教思想のおのおのについて、語り得たと豪語するにちがいないが、しかしそれがもしやある程度にとどまろうと指摘されるならば、各思想の中身は彼女が示すその各思想のすべてに完全に一致させられることはあり得ないであろう。それは推測するに、わたしたち読者 (研究者) が完璧と思えるほどに、彼女の各思想を語ってみたにしても、それぞれの思想に近づかせる読みか研究かしかできなかろうし、その際各思想に対し、わたしたち自らがすでに立つ思想的立場を前面に出して捉えんとするか、はたまたわたしたち自らがこの各思想にかぎらず、他の強い関心の向けられる思想を優先さすかして、批評を試みたり、あるいは彼女が社会思想家や宗教思想家と各呼ばれる肩書相貌のいずれかの世評と結び

合わせたりするごとくに語られてきたにすぎなかろう。

そうみられるはなぜか。前段に記した、例の社会思想や宗教思想が完全（完璧）な各（個別の）思想として打ち立てられていないのは筆者に、この両思想をはじめとする、ヴェーユの諸思想（多くの個別の思想）がかの〈感受性〉を盛り込まずに構成させられ語られているのではないかと受け取らせ得るからである（筆者は彼女にいう諸思想（多くの個別の思想）の代表格であろう社会思想や宗教思想のそれぞれが〈感受性〉を基にして成り立つとみたし、そのことは疾うに前著などで触れたことである）。換言すると、社会思想や宗教思想のおのおのが完全（完璧）に語られてはいない思想であるとみなす因を〈感受性〉に求めることにするならば、〈感受性〉は、筆者が〈感受性〉と同様に彼女独自のと指摘した〈不幸〉と〈力〉の各単語の取り扱われ方に比べて、筆者を除く誰にもいまだそれほどに、取り上げられて批評されていない、要は語られてはいない（明確にされていない）単語と単語から意味される思想などになると見て取られ得るにちがいないのだ。むろん筆者にすれば、〈感受性〉が彼女に打ち出されてくる、語られているその思想になるといわせることでもって、社会思想や宗教思想のみか、科学思想に関する、つまり社会科学、人文科学や自然科学たる三分野に関する、彼女の言及が可能であると強調させずにおれなくなる（諸科学への言及が可能であることを証明させるは後段に譲るほかない）。

さてここで、以上の〈感受性〉についての、筆者の主張において、筆者はこの〈感受性〉がいかなる経緯で導出されたかを振り返ると同時に、まとめおかねばなるまい。まとめおくとしたはこの拙論の以下（次）に繋げるためには欠かせないことだからである。筆者はまず、ヴェーユが生涯に書き残したとされる諸作品を、前号での、なかでも（Ⅲ）表のように年代順に並べてみた。次に、この（Ⅲ）表に他の（Ⅰ）と（Ⅱ）や（Ⅳ）の各表を加えて、おのおのに書き込まれた各作品でもって、彼女の全作品とみなし、その一一の作品中に何度も記される、同一単語（原語）を各網羅すべく取り出してみた。こうした単語はたとえば〈不幸〉〈力〉〈感受性〉〈抑圧〉〈革命〉などであった。そして、筆者は全作品に各付された題名からでも分かる通り、またその題名から推測して、彼女の言及が社会科学、人文科学と自然科学なる三分野に亘るとされるのを知り得る通り、上記した単語を三分野に、換言すると社会思想、宗教思想と科学

思想のおのおのに分類してみた。その際これらの単語のうち、「何度も記される」と書いた、その頻度は100回を越えて使用される、全作品からの単語が選び出された（この条件では〈抑圧〉と〈革命〉の各単語は除かれる）し、しかも同一単語（原語）を同一訳語で用いるよう統一しておくにあって、しかし筆者は、ここに問える〈不幸〉〈力〉〈感受性〉の各単語をばその各中身（意味）に変化（変容）の兆をみせると捉えるばかりか、彼女独自の単語になるとみなしおくことにした。これらの独自と名付けた単語のなかで、筆者の訳語〈不幸(malheur)〉の単語は社会科学や人文科学での各使用が認められるは当然としても、自然科学で質される対象になり得ぬとは、また筆者の訳語〈力〉に対し、彼女が〈pouvoir〉〈puissance〉〈Vertu〉〈pesanteur〉〈force〉という各原語の使い分けを試みており、それぞれの語の頻度ではかの条件に達せずとも、これらの原語を合わせた頻度は100回を優に上回る以上、彼女がそこに何を意図させたかとは、すでに一見していたことである(4)。この後者における〈力〉に「何を意図させたか」に対し、筆者がここで付加さすべきは、彼女が〈力〉の中身（意味）を、すなわちこの変化（変容）を社会思想や宗教思想別にそのいずれかの単語（原語）であらわすほかになかったとされることにある。

だから筆者が「独自の」と見立てた単語のうち、残るは〈感受性〉という単語になる。そのうえ、〈感受性〉は社会思想や宗教思想の各基（支え）として用いられると思える単語である（〈感受性〉と科学思想（自然科学）の関係についてはその有無も含め、次号以降で質すと繰返しおく）ほか、〈感受性〉の中身（意味）をかたちづくるに欠かせないのが〈不幸〉や〈力〉と同様、世界（現実）との関係であり、ヴェーユ（人間）をして世界（現実）の現象を受け入れさせずにおかないことなのである。かつその現象はと問えば、それが〈不幸〉や〈力〉にあっては世界から、要は人間の外部（での現実）からやってくる現象でしかないといえようし、これに反するに、〈感受性〉は人間の内部（での現実）で生じる現象になろうとみることができる。するとここに改めて問わなければならぬは、〈感受性〉とは何かであり、〈感受性〉がどうなれば、社会思想や宗教思想のおのおのを導き得るか、その各基（支え）にみなされ得るかにある。筆者は以上に答えんと試みるばかりか、さらにその他のことを語るにあって、めざすは彼女により〈感受性〉が、また〈感受性〉を中心とした認識

論すなわち哲学に与されるべき一が彼女の諸思想（多くの個別の思想）の一として打ち立てられていることを証明するにあると予め記しておく。

Ⅱ

〈感受性〉はヴェーユに用いられる〈sensibilité〉たる単語で成るかぎり、「単語から意味される思想」（かかる思想を個別の思想という）であり、さらにたとえば身体や魂などとの各単語と結びつく思想、要は「単語を複数以上組み合わせることで意味される思想」（これもまたこの意味での個別の思想とされる）として使われるはむろんのこと（身体や魂は各単語だけでは「単語から意味される思想」に納まるとともに、それら自身は各中身（意味）を変化（変容）させない単語であるといえるが、しかし魂の方は彼女独特の見方に従うことになる）、〈感受性〉は他方筆者にいわせると、この魂すなわち脳の部位も含めた身体諸器官内における運動（動き）をさすからして、運動（動き）自身と同意であった。身体諸器官（五官（感）、内臓（感覚）や脳（魂））の各運動は当然これらが止まる死まで、動き続けている。その動きは人間をして日常（不断）気にとめさせるところにはないにせよ、万が一激しい運動が惹起されるに及んで、日常（不断）の動きに収まらなくなるは明白である。彼女は激しい動きのことをも〈感受性〉と見て取るだけか、こうした運動（動き）に伴なわずにいない身体的魂的苦しみを自らをはじめとする人間の生きる問題にせざるを得なくなったし、その〈感受性〉をば感覚と相違させて理解しようとしていたのだ。だから彼女は次のようなことに言及しつつ、そこに立つ必要があった。すなわち、人間の外部の対象（筆者はこの対象を例の〈不幸〉や〈力〉あるいは〈世界の美〉とみた）に対し、人間の内部たる身体諸器官（ここでは五官や内臓をさす）のいずれかの能動運動なる〈ressentir（感じる）〉が働きかけてはこのいずれかに受動運動なる〈sensibilité（感受性）〉を生じさせる（わたしたちは身体諸器官のことをときに身体感覚諸器官というが、それは一般にそう言い慣わせられているだけのことである）と、またある身体諸器官にもたらされる〈感受性〉が脳つまり魂（une âme）に伝達されよう場合に際しては（une âmeの表記は以下に掲げる魂に同様である）、魂に伝えられた、身体の〈感受性〉に、今度は魂用の能動運動なる〈ressentir（感じる）〉が働きかけては魂用の受動

運動なる〈sensibilité〉を生み出させると、そして人間の外部のある対象が身体にでなしに、直接魂にかかわるときは、魂の能動運動なる〈sentir（感じる）〉がその対象に働きかけては魂の受動運動なる〈感受性〉をもたらすほか、魂で同じ対象を二度目（以降）として〈感じる〉能動運動は〈ressentir〉であり、この際も能動運動が機能すれば、受動運動なる〈感受性〉が生まれるはいうまでもないと。ちなみに、彼女に質された〈感受性〉や感覚への、先輩諸氏たる哲学者の見方はどうであったかといえば、前著で筆者が知るかぎりと書いて一見した通り、〈感受性〉の成り立つ過程のことはともかく、この単語を持ち出した哲学者はディドロやカントであったれど、前者ディドロは感覚を〈感受性(sensibilité)〉と、後者カントは〈感性（Sinnlichkeit)〉（前者にいう〈感受性〉に同意）を感覚と言い換えて呼ぶことをなぜかためらわない、とどのつまり〈感受性〉の中身（意味）は二人にとって感覚に等しかっただけでなく、彼らは〈感受性〉が彼女に指摘されよう能動運動や受動運動によってもたらされるとは受け取らぬにしても、〈感受性〉を産出しよう両運動のそれぞれを感覚の場合と同じごとき能力として捉えていたといい得る。

ディドロやカントのことはともかく、しかし彼らが感覚を能力と見立てるのと同様に、ヴェーユも身体や魂の各〈感じる〉とその〈感受性〉を人間に存在する能力とみるほかなかった。さすれば筆者がさらに受動能力〈感受性〉について、これが能力であると認めるにしても、彼女の方は筆者に、この〈感受性(能力)〉で何を語り得るかと問わせることにあろう。そのとき筆者には、「何を語り得るか」が彼女にあって、本人はそれをめがけたわけではなかろうが、〈感受性（能力)〉を出発点にした認識の起こりの、あるいは知る作用の機序を、すなわち〈感受性（能力)〉に関する、いわゆる認識論を語ることでなければならないとみえる。換言すると〈感受性〉が身体の、身体から魂に伝わるうえでは魂の、また魂自身の生み出すところの各能力となるは前段に記した通りであり、各能力をしていかに機能せしめるかをみるのが「認識の起こり」の、あるいは、「知る作用」の機序（しくみ）を、要するに「認識論」を質すに等しくなるということである。しかしこれらの括弧を付した語句の一部「認識」と「知る」はどちらも一般に精神もしくは意識を、彼女では魂を人間脳の部位に言い換えさせたところでの、その機能と受け取られているようであるが、果た

して「認識」や「知る」機能を精神、意識、魂つまり脳にみなしとどめることで済むのかである。筆者は否と答える。なぜなら彼女に語られる魂を脳に当てはめたにせよ、脳はこれが魂にみなされる以前に、身体（の一部）にほかならないのだから、後段以降に問おう人間理性（知性）で脳を精神、意識やここでいう魂と名付けさせども、魂も身体に変わりがないとみえるからである。するとあの「認識の起こり」が、要は「知る作用」が魂（脳）に存在するとされる諸能力で問われるだけでなく、これも理性（知性）で命名される、身体そのものをさす五官や内臓が各生み出す、例の〈感受性〉さえ各身体における、「認識（知る）」の機序（「起こり（作用）」）に組み込まれているように述べ語られる論、すなわち認識論としての一能力になるのだ。そう捉えておかないことには人間理性（知性）が、それ自身をして身体を見くびるほどの傲慢さを植え付けせしめるだけにされ、身体よりも精神、意識や彼女にいう魂を彼女の意に反して、優位に立たせんとの奢りを極める役目しか持てなくさせられたのである。

「認識（知る）」の機序がもとより諸能力で組立てられる認識論こそ筆者にすれば、ヴェーユにいう〈思惟と行動との関係〉が、この関係を言い換えては「理性（知性）と感受性との関係」が探られることに符合させずにいない、要するに認識論が諸能力をもって成る証しは、この〈思惟と行動との関係〉を筆者なりに具体的にすることにあろう。そのために、筆者はこうした〈関係〉を〈思惟（理性や知性）〉から〈行動（身体の動き）〉への関係とみるよりも（筆者はこの関係を否定するつもりはない）、〈行動（身体の動きすなわち感受性）〉から〈思惟（理性や知性）〉への関係に立つことを筆者自らのはむろんのこと、ヴェーユの主張として捉えると宣する一方、この連続させる論稿のいずれかで、〈感受性〉の記された原文を可能なかぎり持ち出し、それらの原文（またはその訳文）から、彼女に認識論が窺えるかは当然、いかなる認識論になるかをみることに掛かっており、このことをば証明しなければならない。だから彼女に語られる諸思想（多くの個別の思想）にあって、たとえば筆者が先きに、「〈感受性〉がどうなれば、社会思想や宗教思想のおのおのを導き得るか、その基（支え）にみなされ得るか」と問うた際、筆者は〈感受性〉を中心にしてかたちづくられた認識論が、したがって〈感受性〉という「単語から意味させる（個別の）思想」だけにとどまらせず、「身体や魂」という「複数以上の単語を組合

わせることで意味される（個別の）思想」が、社会思想や宗教思想たる各個別の思想の成立以前に確立されていなければならなかろうと、要はこの両思想は〈感受性〉を中心にした認識論なしに成ることがなかろうと思えたのだから、筆者にとっては、認識論が社会思想や宗教思想さえも作り出し得るほか、両思想に共通し、なおかつ両思想の各基（支え）であらねばならないとみえたわけである。

筆者がヴェーユをして社会思想や宗教思想を「作り出す」といわせるように指摘できるは、両思想も〈思惟と行動との関係〉に従われて「作り出」されることにある（それは一見していたごとく、〈行動〉し〈思惟〉する関係にしかなかった)。だから「年譜」によると、社会思想に関しては、たとえば、彼女は、1931年労働者のために、教師の最初の赴任地ル・ピュイ「市長に面会を求める陳情団に同行」、翌年同市での「失業者の無届デモに参加」したり、1932年ドイツに1ヶ月ほどの旅行に出かけていたり、1934年女工として傭われんとしたり、1936年スペイン（市民）戦争に従軍したりした〈行動〉すなわち体験が新聞・労働組合（連合）機関紙・雑誌への各投稿で、当時の労働諸問題やドイツ（あるいはソヴェト）諸問題を掲げ質し、〈工場日記〉や〈スペイン日記〉などを書き上げる〈思惟〉に結びつかせて生み出されたし、一方宗教思想に関しては、たとえば、1935年女工体験後に静養を得るべく訪れたポルトガルでの、またスペイン戦争での火傷後の1937年これも静養のために旅したフィレンツェ、ローマ、アッシジなどでの、なかでも1938年ソレムでの宗教的〈行動〉すなわち体験が、さらに1941年農民哲学者ティボンやペラン神父への彼女の各社会的宗教的〈行動〉すなわち体験が各社に寄稿した社会思想の場合と同様にして、その社会的よりか宗教的諸論文や諸書簡を書きあらわす〈思惟〉に結びつけさずにもたらされはしなかったのである。

だが上記したことで確認すべきは、〈行動〉すなわち体験自体が何をさすかにある。それはもとより、〈行動（体験)〉する度に、あるいは〈行動（体験)〉により、身体が動かされずにいないことである。この身体の動きがたとえば手足を脳の指令を受けるか否かで動かされるといえるはむろんのこと、手足内の神経や血管をはじめとした、それらの身体（諸器官）内全体をかけめぐる神経伝達物質や血液が疾うに触れたことに従えば、日常（不断）の各身体内の、い

わばその〈行動（運動)〉より量的に増加されよう運動量となって伝わり流れるであろうし、ヴェーユはかかる運動量をもさして〈感受性〉と名付けおいていたのだ（ただし彼女は神経内を伝達する物質や血管内を流れる血液（物質）が各何かを質し明らかにさせてはいない。）さらに身体に生じた、不断以上の量的〈感受性〉が〈魂（脳)〉にまで伝えられては当然、〈魂（脳)〉での〈感受性〉となる。これも〈魂〉の〈行動（運動)〉でしかない、だからか〈魂〉の〈行動（運動)〉は何より先きに、〈思惟〉を駆使させるにあらず、〈感受性〉の惹起にあった。〈思惟〉の方はこの〈感受性〉とかかわり通して生じくる。つまり今問う社会や宗教のことに対する、それぞれか同じかの〈感受性〉を素材にし〈思惟〉が可能になるは、例の社会思想や宗教思想の各産出に繋がることを含意させるほか、彼女にいう〈思惟と行動との関係〉をば〈行動（感受性)〉から〈思惟〉への関係に導くことが〈思惟〉にとっては、既存の社会思想や宗教思想への彼女自らの各批評を実現せしめる以外になくなったとみえるわけである。繰返しいうが、〈思惟〉は彼女にあって、現実（実際）的〈行動（体験)〉に即した〈思惟〉でなければならない。要するに〈思惟〉は例に取り上げる社会思想や宗教思想を案出し得た、その社会や宗教への各〈行動（体験)〉に依拠したうえでの、〈思惟と行動との関係〉を成り立たせる〈思惟〉であり、これによってこそ、彼女は〈知的誠実さ〉を守り通したり、「不可知論」を越えたりすることができたにちがいない。だから筆者のように、何らかの対象（現実）に対する〈行動（体験)〉を踏まえない〈思惟（観念)〉でもって、要は机上だけで済ませられる〈思惟（観念)〉でもって、既存の、かつ現今の社会思想や宗教思想を各批評（思惟）できたとて、〈思惟〉自体の行使はなるほど運動（動き）にかかわることになるとみられども、かの身体内全体の運動（動き）に関与させられるのでなく、せいぜい〈魂（脳)〉内のみの運動（動き）にとどまらせるにかぎられよう。それとこうした〈思惟〉自体は彼女によれば、〈魂(脳)〉内の〈精神（un esprit)〉という部位での運動（動き）によりもたらされた〈思惟（観念)〉に対し、たえずその論理（的順序）ばかりをおもんばかるであろうが、しかし〈思惟〉が司ろうとする論理さえおよそ現実（実際）とかかわることなく組立てられているとみるほかなくなろう。

加えていうに、〈思惟〉を可能にするは、人間が生来有する諸能力中の一能

力〈理性（知性）〉であった。〈理性（知性）〉には前段までに一見していた通り、一に、〈魂（l'âme）〉のなかの、〈精神（un esprit）〉と呼ばれる一部位で、この〈理性（知性）〉を働かしめ、その論理に従わせられて、何らかの〈思惟（観念）〉を打ち立てる役割が、一に、〈精神〉は脳たる〈魂（l'âme）〉の外にみえる事物を対象にするか、はたまた〈魂（l'âme）〉内の〈精神〉の部位に直接表出される事物を対象にするかのいずれにおいてもとにかく、こうした対象を〈理性（知性）〉の〈思惟〉に取り出しては、この対象を命名する役割が受け持たらされていた。後者の「一に」あって、要はこれも〈理性（知性）〉の一機能であり、かかる機能はヴェーユが〈la sensibilité〉をはじめとして、〈le malheur〉や〈la beauté du monde〉などの各単語や語句を書き記すことにあったし、読者研究者がおのおのを判断しては、そこから、これまで取り上げられた肩書相貌のごとくに名付けられ得るほか、社会思想や宗教思想という、当の名前を付すことにあったといわねばならぬわけである。また〈l'âme〉、〈l'esprit〉、〈la raison〉、〈l'intelligence〉の各名前もすべてそうなのである。しかし後者の二邦語〈理性〉や〈知性〉の〈思惟（する）〉機能はそのすべてに亘って全能か。そんなことはあるまい。なぜなら筆者にとって、たとえば、二つの単語と語句ならびに二つのその〈思惟（観念）〉でさえ同時に、開く相手に対し話しかける働きを、またこの原稿用紙の升目に重ねて書き足される働きをみせるなどは不可能だからである。そこには述べ記す順序が当然不可欠になり、そのことは〈理性（知性）〉の活用を重んじている人なら誰にでも当てはまらねばならないことである。さらに〈精神〉の部位に配された能力〈理性（知性）〉が、その脳たる〈魂（l'âme）〉の外から受容される事物（対象）を、かつその脳たる〈魂（l'âme）〉内に直接表出する事物（対象）を〈精神〉の部位に各表象されたとて、〈理性（知性）〉による、この表象はいわば実在や観念といえよう、各事物（対象）を獲得することを、要は各事物（対象）そのものになることを示唆させるのではなかった。彼女のことでいうと、彼女が用いる〈理性（知性）〉は何らかの事物（対象）すなわち実在（物）に、人間諸能力のうち一番先きに働きかける能力ではなかった。その働きの前に、身体が動きにかかわっていなければならなかった。身体の運動（動き）は外に存する世界（現実）の事物（対象）に接して、身体の〈能動〉能力〈感じる（ressentir）〉が働き、〈受動〉能力〈感

受性（sensibilité)〉をまずは身体（諸器官）に、そして〈魂（脳)〉へという順にもたらすことであった。だからこの現実（実際）的運動に、要はかかる〈行動（体験)〉に基づいて、彼女はそのときに、〈思惟と行動との関係〉を〈行動〉から〈思惟〉への関係として、またかかる〈行動（体験)〉に基づかないときに、〈思惟〉から〈行動〉への関係として実現させていたといわねばならぬわけである。なかでも〈思惟〉から〈行動〉への関係でいう〈思惟〉には世界（現実）からの素材が皆無であるとみられるのでは、彼女はあの諸論文や諸書簡などの素材をどう自らのものにし、どう批評していたかにおいて、筆者は彼女が当然、素材を先輩同輩諸氏の書き上げた諸作品中に見付けざるを得なくなっては、自らの〈理性（知性)〉でもって、諸作品を読み解き批評していたとみる。素材になった諸作品とは思うに、正統や異端の各キリスト教思想やキリスト教史に、古代ユダヤ（イスラエル)、ギリシア、ローマや中世南フランスから現代にかけての人文科学（各時代（歴史）やその思想)、社会科学（各時代の政治・経済・社会）や自然科学ならびに自然科学史に、むろん哲学や哲学史に関することになろう。こうした場合、彼女は彼女の生きた当時を除いた時代（歴史）に立ち会えないことを示唆させるゆえに、〈思惟〉から〈行動〉への関係である〈思惟と行動との関係〉を優先させるしかないはいうまでもないことである。

ここで筆者は前段に触れた〈思惟と行動との関係〉がヴェーユにとって〈行動〉から〈思惟〉への関係として捉えられたと繰返すにしろ、しからば彼女はなぜ〈行動〉をば〈思惟〉より先きに立てたのかを以下数段に亘って筆者なりに説明する必要がある。この〈思惟と行動との関係〉は筆者にいわせると、〈思惟〉や〈行動〉の各単語に呼応させられた〈魂（l'âme)〉と身体（le corps）との関係に換言させ得た、つまり「魂と身体との関係」としたなかで、〈魂〉に〈思惟〉を充当さすは当然にしても、身体に〈行動〉を割り当てずに、〈思惟と行動との関係〉は成り立たないし、ましてやそれぞれの関係のいずれかが見失われては、これも筆者にいう「認識の起こり（知る作用)」にかかわらせることを示唆させはしなかったのだ。彼女にあって、〈思惟と行動との関係〉での〈思惟〉をして、〈魂（l'âme)〉中の、〈理性（知性)〉の配される〈精神（un esprit)〉の部位で発揮せしめるといえたのだから、〈行動〉の方は、他方で述べた〈魂と身体との関係〉に従わせるまでもなく、〈身体〉に置き換えてかま

わぬわけである。したがって〈行動〉は、仏語辞典で〈Faculté d'agir（働きかける能力)〉[5]と表記されるはさておき、国語辞典に「何かをしようとして、実際にからだを動かすこと」[6]と書かれるうち、「実際（現実）にからだ（身体）を動かす」、身体の運動（動き）を指し示す意味でなければならない。だが多くの人たちは「からだ（身体)」が「認識の起こり（知る作用)」に関係するとみなすのを訝るにちがいない。つまり日常（不断）人は身体をさして、そこに「認識の起こり（知る作用)」が生じるとは認めない。それは彼女の場合でさえ、〈魂〉の役割とみられるからだ。しかしそういい切ってよいのか。たとえば上記した〈行動〉の謂にあって、「何かをしよう」はなるほど、彼女にいう〈魂（l'âme)〉の能力に、人にいう精神や意識の能力に、要はその各〈理性（知性)〉での〈思惟（する)〉や〈意志（する)〉の能力によるのであって、この能力に従って「からだ（身体）を動かす」〈行動〉を生じさせると、それでもこうした〈行動〉は「からだ（身体)」（以下身体と表記）の一部たる脳の、換言すると〈魂〉の、精神の、意識の運動（動き）にかぎられて理解されるといわねばならぬのだ。彼女は確かに、かかる〈行動〉が自らにいう脳すなわち〈魂〉の運動（動き）をさすとみてもいた。

しかし同時に、「身体を動かす」〈行動〉は、〈魂（脳)〉の運動（動き）だけが身体のすべての運動（動き）に当てはまると断じたりしてはならない（かりに断定されるならば、これは今取り上げる問題ではないにせよ、ヴェーユに窺えよう、例の〈心身（身心）合一〉の問題をば何をもって実現させ得るか、答えに窮するにちがいなかろう)。つまり〈行動〉は彼女にとって、脳以外の「身体を動かす」謂にもっぱら充当させられ用いられたと捉えおくほかない。しからばこの「身体を動かす」〈行動〉とは何かである。それは身体に生じる能力であり、身体の能力こそいわずと知れたこと、〈感覚〉でなしに、〈感受性〉でしかなかったのである。だからここで繰返してでもいわねばならぬが、筆者が彼女にいう〈思惟と行動との関係〉において、そこに記される〈思惟〉と同様に、〈行動〉をもことのはじめから〈魂（l'âme)〉の能力とみなすならば、たとえば、実際（現実）の「歩く」や「走る」〈行動〉は身体（足）に任せるにしろ、かかる〈行動〉を促し導くのも〈魂（l'âme)〉の何らかの能力でなければならぬであろうし、「何らかの能力」こそかのデカルトに代表させていうに、

〈精神（l'esprit)〉や〈魂（l'âme)〉の各〈思惟（する)〉要はその〈意志（命令)(する)〉能力なのであり、この能力に頼る以外になくなろうといい得る。さらに彼に打ち出された〈真理の探求〉の用法にとっては、〈行動〉に等しくなろう運動（動き）をば、上記したうちの〈精神（l'esprit)〉の〈理性（知性)〉に与する〈思惟（する)〉能力の運動（動き）に見立てるだけでこと足りると、それがこの用法での、彼にいう「認識の起こり（知る作用)」すなわち〈認識論〉に相当しようといわせることになる。以上のように、彼に関したことから、彼女の場合を推測すると、〈行動〉が彼女にあって、〈魂（l'âme)〉(脳）中の一部位〈精神（un esprit)〉の〈理性（知性)〉の能力の運動（動き）と捉え得たは、デカルトにいう〈精神（l'esprit)〉(だが彼は筆者のみるところ、脳の外をこの〈精神〉とした）と比べられる〈思惟と行動との関係〉にかかわらせ、かかる〈関係〉での〈行動〉を〈思惟（する)〉範疇に組み入れられる能力とみるならば、この能力は〈精神〉内だけの運動（動き）でしかなくなろうし、〈行動〉すなわち「この能力」は〈思惟（する)〉同志（仲間）の能力であり、その〈関係〉を〈思惟〉から「この能力」への関係にする以外になかろうことを示唆させる。したがって、再度「何かをしようとして、身体を動かす」と書かれた語句を例に持ち出して、この語句中の「身体を動かす」を〈行動〉の謂とみなせばみなすほどに、〈行動〉は「身体」を脳と捉えることでの、脳（身体）の〈理性（知性)〉に関する能力の運動（動き）と指摘しておくほかになくなるのだ。筆者はこうした脳（身体）の運動（動き）を即座に否定できないし、否定する者でないが、しかしその脳（身体）の運動（動き）は実際（現実）に眼にみえる「歩く」「走る」、身体（足）の運動（動き）と違って、外見からは分からない。だから「認識の起こり（知る作用)」に脳の、彼女にとっては〈魂(l'âme)〉の諸能力の運動（動き）をかかわらせるだけでは、「認識の起こり（知る作用)」をはじめ、かの「思惟と行動との関係」さえ、このいずれもおよそ脳（魂）の運動（動き）に準じて成ると繰返し断われども、しかし日常（不断）にいう身体の運動（動き）をさして語られるとはみえないわけである。なぜなら、筆者にいう「認識の起こり（知る作用)」は確かに脳（魂）の諸能力の機序（しくみ）をあらわすにしても、そこにこの脳（魂）を除いた、他の身体による運動（動き）（ここは「他の身体」の〈行動〉をさすのと同様になる）を

関与させずに、彼女にいう〈思惟（魂）〉と〈行動（身体）〉は〈関係〉しなくなるといわねばならぬからである。だがかかる〈関係〉が脳（魂（l'âme））の諸能力の運動（動き）としてのみ語られる場合、もう一度記すが、「何かをしようとして、身体を動かす」とされた例は少なからず、その脳（魂）中の一部位〈精神（un esprit）〉（ここは大脳皮質の場と推測する）の〈理性（知性）〉が上記した「歩く」や「走る」ことを〈思惟〉して（〈精神〉の運動（動き）だとて、実際にはいまだ「歩」いたり「走」ったりはしていない）、次いで身体（脳）を「歩」け「走」れと各意志（命令）させるごとく「動かす」（これも実際（現実）の身体（足ばかりか手）の運動（動き）にはない）ことを含意させるほかなかったのだ。したがってこうした〈思惟と行動との関係〉は〈精神〉中の〈思惟〉からこの範疇での他の能力への〈行動〉要は運動（動き）の〈関係〉にすぎなかっただけなのである。それはまた、「認識の起こり（知る作用）」すなわち〈認識論〉が外なる世界の実在に関知しない（あるいはその実在を取り入れない）〈理性（知性）〉を行使させ、観念を生み出すに役立つはずであり、〈認識論〉の一として一般にいわれる〈観念論〉の誕生である。そして筆者にはデカルトあるいはサルトルの各認識論が観念論になると、またこの彼らとは相違する観念論を打ち立てたと思えるカントは、彼による観念論がデカルトの主張したであろう、〈真理の探求〉以外の一用法（一学説）に倣う哲学であることを知り得なかったとみえるわけである。

しかしながら「身体を動かす」は再度確かめられねばならぬが、果たして身体の一部とみなされもしよう脳の運動（動き）だけを指し示すにとどまるのであろうか。「身体を動かす」という〈行動〉はヴェーユにあって、脳の運動（動き）のみでなく、つまり〈魂（l'âme）〉とされた脳（身体）以外になる、身体の運動（動き）をさすと、換言するとかかる〈行動〉は脳（身体）を「動かす」ほかの、身体の運動（動き）を示すと断じる一方、この身体の運動（動き）において、筆者は脳（身体）の一部位〈精神〉の〈理性（知性）〉が「何かをしようと」〈思惟〉するや否や、「身体を動かす」〈行動〉に向けて〈意志（命令）〉を下だすとされることを、さらに〈意志（命令）〉をして実際（現実）に「身体（手足）を動か」しめるとされることをもっぱらにさせるのではなく、その肝腎要なことを身体内の、たとえば神経内の「神経伝達物質」の、かつ血管内

の血液の各伝達や流れつまり運動(動き)に求め得るとみておかねばならなかったのである。筆者が思うに、彼女が自然科学なかでも現代科学の研究に拘りをみせた理由はここに見出されると。とまれ筆者はこうした身体（内で）の運動(動き）を、とどのつまり脳を除いた身体（諸器官）（五官や内臓）に各まとわり付く神経や血管内の「神経伝達物質」や血液それぞれが〈量〉的に生じる運動（動き）を〈感受性〉という能力に捉えおくほかなかった。要はこの「身体を動かす」ことが同時に身体の能力〈感受性〉と呼ばれることになると読んできた。換言すると〈感受性〉の発生はまさしく今実際（現実）に身体が動いていることをさす。しかも〈感受性〉は外の世界の現象たる、例の〈不幸〉や〈世界の美〉に〈量〉的に接し得る能力とみられるのだから、日常（不断）の身体内での運動（動き）だけでない運動（動き）を伴なわせるし、彼女にはこうした運動（動き）をもって生きる生き方が課せられる能力でなければならなくなるわけである。だが〈感受性〉はなぜ〈不幸〉や〈世界の美〉に触れさせ得るといえるか。〈感受性〉は彼女（人間）にとって、〈不幸〉や〈世界の美〉である世界に対応し、かかる世界を受け入れさせる、唯一の能力となる。さらに問われるは、〈感受性〉が身体の能力とみなされたために、〈魂〉でいう「認識の起こり（知る作用)」の能力と捉えられるかにある。

そこで筆者は筆者なりに、身体の能力とみた〈感受性〉が〈魂（l'âme)〉に関係させられていわれよう「認識の起こり（知る作用)」にかかわり得るかを明らかにさせておかねばなるまい。この「認識の起こり」の「起こり」とは「知る作用」の「作用」と同じく、「働き」の謂として見て取るとともに、「認識の」あるいは「知る」との各限定を受けるゆえに、「認識」や「知る」を可能にさせる諸能力の一一の能力の「働き」すなわち運動（動き）が各どのような順序にてそれこそ「起こり」得るか、要は〈魂（l'âme)〉中のあらゆる能力がいかなる機序（しくみ）にあって、「認識の起こり（知る作用)」を述べ語らせる（これが〈認識論〉ともなる）かを探ることでしかなくなる（したがってすでに取り上げた、〈魂（l'âme)〉中の〈精神（un esprit)〉たる部位に配された諸能力の「働き」すなわち運動(動き)も上記「要は」以下云云と記した場合と同様となる)。「認識の起こり(知る作用)」要するに〈認識論〉において、〈魂（l'me)〉のある時を想定し、そこに真先きに生じる能力は何か（彼女では〈感覚〉と同

時にか〈感受性〉であった)、次いで「何か」たる能力と相違する他の能力が、また「何か」たる能力に結びつく他の能力が各産出されるのか、この「他の能力」は何か（彼女では〈感情〉であり、〈想像〉や〈理性（知性)〉そのほかであろう)、そのうえ以上の場合の各能力はいかなる「働き」すなわち運動（動き）にあるかなどが検討されよう。そしてここから彼女にとって、〈魂（l'âme)〉中の〈感情〉〈想像〉〈理性（知性)〉やそのほかの能力のように、〈感受性〉は、その「働き」すなわち運動（動き）は〈魂（l'âme)〉に関したことだけにかぎられて受け取られるのかを再度質し、かつ答えおかねばならない。その際例の〈感覚〉能力の方はどうであったのであろうか。〈感覚〉は〈魂（l'âme)〉で産出されるよりか、むしろこの〈魂（脳)〉以外の身体（諸器官）（五官や内臓）のおのおのからそれなりの役目をもって発せられる能力である。〈感覚〉の、こうした（身体）諸器官から発生することでは同様でも、〈感覚〉と違った能力を打ち立て、これを〈感受性〉としたは彼女だけであった。

Ⅲ

しからばヴェーユは〈感覚〉と〈感受性〉はどこがどう異なっていたとみなしたか。〈運動はわたしたちに、ひとつの変化をもたらす…感覚をたえず与えてくれる。しかし変化というものは質的であり、運動というものは量的である〉。あるいは〈感覚は質料、空間、時間も含まず、それ自体以外わたしたちに何ももたらし得ず、いわば何ものでもない〉と語られた、彼女の引用文を持ち出し、すでに明かした通りである。だから〈感受性〉は前文から、〈運動〉自体がゆえに、〈量的〉なのであり、後文から、〈質料、空間、時間〉を含むとみることができるわけである。さらに彼女がかのカントを話題にした際に、彼女に〈感受性の一般的な概念〉は彼にいう〈美と関連する〉、〈空間と時間について用いる純粋な感受性と無関係ではない〉と指摘させたように。ヴェーユに記された〈感受性〉や〈純粋な感受性〉はカントにとって、それぞれ〈感性（Sinnlichkeit)〉や〈純粋直観（Reine Anschauung)〉とされるはむろんのこと、一方で〈感受性〉や〈感性〉が、また〈純粋な感受性〉や〈純粋直観〉が各前者の語では彼女にいう〈魂（l'âme)〉中の一部位〈魂（une âme)〉に、各後者の語では彼にいう〈精神（Geist)〉に関係するとみられるは確かなことである（だがこれ

まで述べたことで知る通り、彼女の場合、〈感受性〉が〈魂（une âme)〉によるだけでなく、身体にさえ生じることを、要は身体の能力〈感受性〉のことを主張するは筆者にすぎない。以下の本文参照のこと)。さらに付加するに、彼女が彼を評する、上記の引用文に、例の〈感覚〉に関して彼女に記された〈質料、空間、時間〉の諸語のうち、〈質料〉が書き込まれないのはおそらく、彼も〈観念論〉者といわれるゆえか、〈質料〉すなわち物質については不問にせざるを得ないと指摘できるからである。彼女でいえば、「物質」の一例はあの「神経伝達物質」をさすのであろうが、それでもこの「物質」は身体内に生じくるのだから、彼女は〈実在論〉者や〈唯物論〉者ではないといわねばならぬわけである（このことも疾うに一見していた)。彼女にあって、前記したところの世界の現象といわせる〈不幸〉や〈世界の美〉の語（句）のなかで、たとえば〈世界の美〉はカントが〈美〉を〈精神〉で判断していたように、ことのはじめから、〈魂〉と関係してもたらされたといえよう。〈世界の美〉が〈魂〉と関係するとみなされる際はもとより〈魂〉が持ち合わせる能力で可能になる。「認識の起こり（知る作用)」の最初に当たって、彼女が頻繁に用いる能力（語）を知っておくべきである。それは〈sentir（感じる)〉なる能力である。〈sentir（感じる)〉は繰返しいうが、〈魂（l'âme)〉中の一部位〈魂（une âme)〉に局在していた。だから〈sentir（感じる)〉は〈魂（ume âme)〉の能力になる（また彼女に従うと、〈sentir〉が働きかけてから、〈空間と時間〉を置いて、同じ〈世界の美〉に接し〈感じる〉とき、〈ressentir（再び感じる)〉が使用される使い分けをみることができる)。しかして〈sentir〉が「働きかける」とは、これが〈能動〉能力であることを意味させずにいない。〈魂（une âme)〉にこうした能力がみられることを、〈世界の美〉に代表させてもう一度いうに、この〈能動〉能力が〈世界の美〉にそれこそ「働きかける」ならば、要は〈世界の美〉を受け入れられるべく、これまで指摘した語句でみると、〈世界の美〉に「触れ得る」ならば、かのデカルトが〈能動と受動はつねに同一のことがらである〉と主張するように、彼女にいう〈能動〉の〈sentir〉にあっては、その〈受動〉能力〈感受性〉を生み出し得るといえたわけである。そこで彼女が彼女なりに、彼にいう〈能動と受動〉と理解し、〈感じる〉と〈感受性〉を打ち出さないことには、〈魂（l'âme)〉全体で述べ語られる「認識の起こり（知る作用)」すな

わち〈認識論〉をかたちづくる、この一能力すら見出せなくなる。しかもこの〈認識論〉を組立てる一能力は彼女の場合、〈魂（une âme)〉の、要は脳の一部位に局在し、〈能動と受動〉という運動（動き）を伴なわすことを証しするのだ。今筆者がここに脳と、かつ脳の運動（動き）と見立てられるようにも記したは、脳が身体の一部であることでもって、例の「身体を動かす」とした表現の方へ論を導くとともに、その表現が可能なことを以下の段落でさらに明らかにし強調したいがためである。要するにかかる表現に答えるには何はともあれ、例にした〈世界の美〉がなぜ当初から〈魂（une âme)〉つまり脳（身体）にかかわって捉えられるといい得るのかを筆者なりの説明なくしてはじまらないのである。

筆者はこの問いに対し、〈魂（脳)〉の能力〈感受性〉が〈世界の美〉に「触れ得る」といえたところで、今記したばかりの語（句）〈世界の美〉、〈魂〉、脳や〈感受性〉さえ、すでに一見した通り、〈感受性〉の語を除いては当然のこと、ヴェーユ以外の先輩諸氏の〈理性（知性)〉で〈思惟〉し名付けられていたことを確認する。〈感受性〉の方は上記でも知り得るように、〈感受性〉の用法が彼女にあって、一般にいう〈感受性〉と異なる意味を有し、それでか術語とみなされるが、これもむろん彼女の〈理性（知性)〉に掛けられての命名となる。またこれらの語（句）のうち、なかでも、彼女にいう〈美〉に〈世界の〉の限定語が修飾するはともかく、カントを例にした際の〈美〉が、〈美〉に「触れ得る」人たちにとって、かの〈純粋直観〉（または彼女にいう〈純粋な感受性〉）によって判断できたとされるよりか、これも同じく〈理性（知性)〉の作用から、一般には〈美〉を〈感情〉もしくは情動や情念という各名前を付した能力として受け入れているのではなかろうか。しかりである。だが何ゆえそのように受け取られるか。彼女が〈世界の美〉に「触れ得る」ことを、たとえば〈魂（脳)〉の能力〈感受性〉以外に、上記した〈感情〉、情動や情念という各能力のなかの一能力でときに可能になるとみなし、この一能力を〈感情〉に見立てみるならば、〈感情〉それ自身も身体諸器官（五官や内臓）でなしに、もとより〈魂（脳)〉の働きだけで作られた能力にすぎなかろうと、さらに筆者にすれば、〈世界の美〉なる対象をこの場合〈感情〉として「触れ得る」には、〈魂（脳)〉の〈能動〉能力〈ressentir〉が働かねばならなくなろうといい得る。すると人はそこでも

また、こうした見方に訝しい思いを禁じ得ないであろうと筆者に推察させる。しかし筆者が以下のごとく記すことでは、この見方は別段疑わしくはならないにちがいない。ここにまず、〈能動と受動〉のことが、そして、上記していた〈ressentir〉も〈sentir〉も今問うている〈魂（脳）〉としての各能力、しかも各〈能動〉能力であったことが想起されていなければならない。筆者がこれらのことを踏まえおくにせよ、前記中の〈世界の美〉に対しては何よりも、〈魂（脳）〉の〈能動〉能力〈sentir（感じる）〉が働きかけて、その〈受動〉能力〈sensibilité（感受性）〉を生み出したと指摘し得ることにあった。そのうえかかる〈感受性〉に「二度目（以降）」働きかける能力が〈能動〉能力〈ressentir（感じる）〉であるとみた（この際の〈受動〉能力も〈感受性〉になるし、その〈ressentir〉は〈魂（脳）〉の〈能動〉能力の一方の用法といえる）。だから先きに質したところの〈世界の美〉にこの〈感受性〉としてではなく、〈感情〉として「触れ得る」となれば、〈受動〉能力〈感情〉の〈能動〉能力は〈sentir〉でなしに、同じく取り上げおいた〈ressentir〉でなければならぬであろう。彼女にあって、この〈ressentir〉は繰返すが、〈感じる〉を〈再び〉働きかける謂になり、かつ〈再び感じる〉訳語でもって、その〈受動〉能力〈sentiment〉か〈affection〉かを、要は各訳語〈感情〉を産出せずにいない、〈魂（脳）〉の〈能動〉能力の他方の用法に与するわけである。もちろん、〈世界の美〉に〈能動〉能力〈ressentir〉が働きかけ、その〈受動〉能力〈sentiment〉か〈affection〉かのいずれをもたらすことは、これらの能力がおのおの〈魂（脳）〉内の神経や血液の各運動（動き）に従った結果にすぎないと、換言するとかかる運動（動き）が〈魂（脳）〉内にみられるからこそ、このような〈能動と受動〉の関係が成り立つということになる。このことはだから彼女に、人間にはどうすることもできない〈必然性〉にあるといわせる一つだし、また〈受動〉能力とみなされる情動（émotion）や情念（passion）に各対応して働きかける、その〈能動〉能力も上記した能力と同じ〈ressentir〉でしかないと語らせるわけである。さらに〈受動〉能力の情動や情念に関していうと、このそれぞれに対する〈ressentir〉が〈魂（脳）〉の〈能動〉能力の、前記した「他方の用法に与する」とみることでは、〈感情〉について述べたと同様である。

要するに以上のことは次のようにもまとめられる。一に、〈魂（脳）〉の運動

(動き) における、〈能動〉能力の一つ〈ressentir〉には「一方の」や「他方の」と記した用法が窺えたと、一に、「一方の」は後述するにせよ、「他方の」の〈ressentir〉にとっては、こうした〈能動〉能力が例の〈世界の美〉に働きかけることで、〈sentiment〉か〈affection〉かなる〈受動〉能力を、一に、この〈感情〉のいずれかより激しい運動 (動き) にある〈émotion〉なる〈受動〉能力を、一に、この情動よりさらに激しい運動 (動き) にある〈passion (情念)〉なる〈受動〉能力を各産出させ得ると、一に、各〈受動〉能力は同じ〈受動〉能力とされる〈感受性〉はむろんのこと、すべて脳たる〈魂 (l'âme)〉中の〈魂 (une âme)〉を出所にしていたということである。そのとき上記した〈感受性 (sensibilité)〉のことでは注意することがあった。つまり脳たる〈魂 (une âme)〉が最初に〈感じる〉を例の〈世界の美〉に発揮し、その〈受動〉能力〈感受性〉をもたらし得るは〈能動〉能力〈sentir〉なのであって、この〈魂 (une âme)〉において、最初に (〈感情〉形成の前にの謂)〈能動と受動〉の関係をかたちづくるは、〈sentir (感じる)〉と〈sensibilité (感受性)〉の各能力による使われ方にあるとみえるわけである。これを基準に、例の〈世界の美〉に「二度目 (以降)」再び〈感受性〉を生じさせ得んとするならば、「一方の用法」としての〈能動〉能力〈ressentir (感じる)〉が働きかけて、その〈受動〉能力〈sensibilité〉を生み出す関係が導き出されねばならなかった。しかし再度いうが、例の〈世界の美〉を、〈受動〉能力〈感受性〉で「触れ得る」のでなしに、〈受動〉能力〈感情〉あるいは情動や情念で各「触れ得る」ならば、このいずれにも応じた〈能動〉能力は〈ressentir〉(という「他方の用法」) に従うのであり、〈ressentir〉が各〈受動〉能力をもたらす役目を担わざるを得ないであろうと。

Ⅳ

しかして〈感覚〉はどうなのか。〈感覚〉については、周知のように〈感覚〉を忌み嫌ったヴェーユにあっても、おそらく前段までに述べてきたことと同様にみなされるにちがいない。ここでは、森の新緑が身体諸器官 (五官や内臓) を通さずに、直接〈魂 (l'âme)〉中の〈魂 (une âme)〉に色鮮やかに映えるのを感じ、その〈感覚〉として〈魂 (une âme)〉に受容されたと仮定してみよう (身体 (諸器官) のことはのちに取り上げる)。このとき〈魂 (une

âme)〉は「森の新緑」なる対象に「最初に」〈能動〉能力〈sentir〉を働きかけて、その〈受動〉能力〈sensation（感覚)〉を生じさせると、また「二度目（以降)」かかる対象を〈感覚する〉際は〈ressentir〉をかかわらせ、その〈sensation〉を得ると、さらにこの対象を〈感覚〉でなしに、〈sentiment〉か〈affection〉かの〈感情〉として、あるいは鮮やかさのより強い〈émotion（情動)〉やそのもっとも強い〈passion（情念)〉として各「触れ得る」ならば、〈能動〉能力はもはや〈sentir〉でもって当てはめられるのではなく、〈ressentir〉でなければならぬであろうと読む。

さすればここに問われるは、かの〈感受性〉からはじまり、〈感情〉、情動や情念にもときに繋がる場合と、〈感覚〉からはじまり、〈感情〉、情動や情念にもときに繋がる場合とにあっては、いかなる相違が見出されるかにある。これも疾うに答えていたごとく、前者の各能力への移動と後者の各能力への移動とにはそれぞれ、〈魂（une âme)〉内の神経や血管を通る物質などの、〈量的〉運動（動き）にみなされた各能力と、〈質的変化〉として扱われた各能力との違いがみられるからであった。ただしヴェーユは〈質〉をあらわすとされる〈sensation（感覚)〉を一見した通り、〈何ものでもない〉といいつつ、その〈感覚〉の存在を容認する。つまり彼女は〈感覚〉ならびにこれにかかわる〈感情〉、情動や情念が在ると認めるが、それらを「〈感受性〉からはじまり、〈感情〉あるいは情動や情念にもときに繋がる」ほどには問題にしないということである。なお今記した「〈感受性〉からはじまり」云云にあって、〈感受性〉を含めた諸能力が〈量的〉運動（動き）を伴なわせるのをこの諸能力の特徴の一に見据え得ても、このことだけが特徴なのか。否。一般に語られることを参照にしては、筆者のみるところ、ここでは〈感受性〉を除外して（彼女にいう〈感受性〉はいまだ一般に周知されている能力ではないからだ)、〈感情〉、情動や情念の各〈量的〉運動（動き）がどうあるかは、〈魂（une âme)〉における、〈感情〉によりも、情動や情念においてこそ、〈量的〉運動（動き）の激しさが増すと前記したことにかかわらせ得ると。さすれば情動や情念は、人によってときに、身体が身震いする経験を有するように、この〈魂〉の各能力の〈量的〉運動（動き）に従っては、かかる〈量的〉運動（動き）が〈魂〉にとどまるのみか、〈魂（脳)〉以外の身体（の神経や血管各内部）にさえ伝えられ、身体が身震いする

ほどに「動か」されくるということである。だから〈魂〉のこうした諸能力のうちで、なかでも人が〈感受性〉に与し生じる情動や情念に各襲われるや否や、各能力を身体に伝わらせることも特徴の一に加えられるわけである（だがたとえば〈量的〉運動（動き）でいわれる〈感受性〉が当初から激しさを増すと捉えられる能力とみなされるならば、〈量的〉運動（動き）の移動による、その激しさは情動や情念にかぎられるだけではなしに、〈感情〉にすら当てはまるとみることができるであろう）。

一方ヴェーユにとって、〈魂（une âme）〉の〈能動〉能力〈sentir（感覚する）〉が〈受動〉能力〈sensation（感覚）〉をもたらすといわせるとき、この〈感覚〉は前段で主に〈感受性〉を語った際のように、〈感情〉、情動や情念の各能力を惹起させたり、またその各能力が身体に伝えられたりするのかである。筆者は前者を肯定し、後者を疑問だと答えおく。前者をしかりと断じたは、〈感覚〉の〈感情〉、情動や情念への各移動がこの移動に従い、〈質的変化〉の強さ（感度）にあるといえたからである。しかし後者のことを疑問に思えたは〈魂（une âme）〉で生み出される、〈感覚〉からはじまり、〈感情〉、とりわけ情動や情念に各移動する際の〈質的変化〉が身体に順次伝わる（むろん各能力の一つだけの伝達の方が通常であろう）という〈魂（une âme）〉から身体への関係ではなく、たとえば絵画や音楽の各鑑賞にあって、おのおの視覚や聴覚（などの五官）による色彩や音色の〈質的変化〉の、各〈ressentir（感覚する）〉して産出される〈感覚〉の感度が〈魂（une âme）〉のみにもたらされよう〈感情〉、情動や情念（の感度）の各能力よりも先きに生じるとみられるならば、むしろこのことをもって、この「魂（l'âme）と身体との関係」はこうした身体（諸器官）（五官や内臓）から〈魂（une âme）〉へ伝わる関係にこそあると捉えおくことができたからである。そこで〈感覚〉が「身体から〈魂（une âme）〉へ伝わる」と指摘したに反して、先きに筆者がこの〈感覚〉を「〈魂（une âme）〉から身体に」伝達させる能力と読んだは、いかなることが念頭にあったかに触れておかなくてはならない。〈感覚〉の出所は一般に身体（諸器官）（五官や内臓）の働きによるといわれるのであり、それなしに〈魂〉（以下〈魂〉とのみ表記するは〈une âme〉の謂である）に伝わり、〈魂〉としての〈感覚〉が導出されないにもかかわらず、筆者が〈感覚〉における「魂（l'âme）と身

体との関係」を質すにあって、再度確認するが、上記した「身体から魂への（伝達の）関係」のほかに、「魂から身体への（伝達）関係」がみられると述べたことに拘るは、彼女が次のように語るからにすぎない。すなわち、「〈魂〉から身体への（伝達の）関係」をかたちづくらせるは、一に、彼女が〈魂〉の一能力として、〈受動〉能力〈感覚〉を生み出す〈能動〉能力〈sentir〉を現に認め用いている（〈感覚〉に対応するゆえに、〈sentir〉は〈感覚する〉と訳しておく。また彼女は〈魂〉の〈能動〉能力にこの〈sentir〉のほか、〈ressentir（再び感覚する）〉をも容認した。しかして〈ressentir〉は身体に対しても使用されたし、身体の〈能動〉能力であった）、要するに〈sentir〉が〈魂〉の能力として使用させられなくば、〈魂〉で産出される〈感覚〉が身体にさえ伝わらない（なぜかは後述する）し、彼女は身体に伝達された〈魂〉の〈感覚〉に向けて、身体の〈能動〉能力〈ressentir（再び感覚する）〉ことを打ち出し得なかろうことにあると、一に、この〈ressentir〉を今「再び」〈感覚する〉と訳したは、身体用の〈ressentir〉が〈魂〉用の〈sentir〉と関係を持つことに、しかも〈sentir（感覚する）〉が〈魂〉（内）だけでなく、身体にも「再び」とはいえその機能を発揮せしめる影響を与えさせずに彼女に〈(res) sentir〉（の語）を選ばせなかった（これは彼女が身体の〈機能〉）能力に〈sentir〉（の語）を使わないことを意味させる）ことにあると、しからば一に、筆者は何ゆえ、〈魂〉の〈sentir〉とその〈感覚〉が身体にすら「再び」たる能力でもって影響を及ぼすだけか、他方で「身体から〈魂〉への（伝達の）関係」を可能にさせるようかかわると主張し得たのかである。これには〈感覚〉が何より、〈魂（l'âme）〉中の〈魂〉の〈sentir〉とのみか、もうひとつの部位である〈精神（un esprit）〉の能力〈思惟〉に与する記憶する（garder la mémoire）とその記憶（mémoire）に関連すると答えおかねばなるまい（彼女にいう〈魂（l'âme）〉中の〈魂〉と〈精神〉の各部位は筆者のみるところ、それぞれ脳の「視床（下部）」と「大脳皮質」であった）。つまりその都度〈魂（視床（下部））〉で生じた〈感覚〉は〈精神（大脳皮質）〉に「記憶」として蓄積されるという。たとえば野球経験者にとっては、ボールが飛んでくる方向をみて追いかけながら、どの辺に落ちるか、胸元で受け止められるかなどの〈感覚〉をば予測せずにおれなくなる。換言すると〈魂（l'âme）〉はすでに経験して蓄えられていた「記

憶」に頼ってか、この場合に起きるであろう諸〈感覚〉から、ボールを捕えるべく予測させることになる。だから〈感覚〉は〈精神〉の〈思惟（記憶）〉と関与し、いわばこの支配から脱け出せはしないといえるわけだ。ならば、このことは〈魂〉の〈sentir〉とその〈感覚〉が〈精神〉の〈思惟（記憶）〉に関係するはもとより、かかる〈魂（l'âme）〉をもって、それ以外の、要は脳以外の身体にもかかわることを示唆させよう。かつこのことが筆者にいう「〈魂（l'âme）〉と身体との関係」として問われるならば、ここではもはや「〈魂（l'âme）〉から身体への（伝達の）関係」にならざるを得なかろうし、また〈精神〉の〈思惟（記憶）〉が〈魂〉の〈sentir〉とその〈感覚〉を呼び起こすといわれるかぎり、こうした〈魂（l'âme）〉による影響は身体（諸器官）（五官や内臓）に各発する〈感覚する（ressentir）〉とその〈感覚（sensation）〉にすら及ぶことになろう。なぜなら身体にあって、身体の〈感覚する〉とその〈感覚〉は〈魂（l'âme）〉と結びつくことなく、つまり〈魂（l'âme）〉中の〈感覚〉と「記憶」の影響を受けずに、この「身体から〈魂（l'âme）〉への（伝達の）関係」を成り立たせることができない（身体の〈感覚〉を語る際、その〈能動〉能力〈ressentir〉は身体の〈感覚〉を生じさせる、唯一で最初の能力になるからして、〈再び感覚する〉とではなく、〈感覚する〉と訳さねばならない）。なぜか（これは先きに「後述する」と記したことに対する答えも含む）。一に、〈魂（l'âme）〉要は脳以外の身体（諸器官）（五官や内臓）で各〈感覚する（ressentir）〉とその〈感覚（sensation）〉（デカルトにいう身体の〈感覚（sens）〉）が〈魂（l'âme）〉要は脳に伝達されなくば、〈魂〉部位における〈感覚（sensation）〉（デカルトにいう〈魂（l'âme）〉の〈感覚（sentimentやpassion）〉はおろか、〈精神〉部位での〈思惟（記憶）〉にかかわらなくなろうし、〈感覚〉が少なくとも〈魂〉と身体に関係させられるならば、疾うに指摘した通り、彼女にこうした〈感覚〉を「〈魂〉から身体へ」また「身体から〈魂〉へ」各伝達させることで成る〈心身（身心）合一〉が説かれるにちがいなかろう（だが彼女は〈感覚〉を軸とするところでの〈心身（身心）合一〉を肯定することはないであろう）と、また一に、〈魂〉に〈感覚する（sentir）〉が彼女に取り上げられなければ、あるいは〈魂〉に見受けられても作用しなければ、〈魂〉における〈感覚（sensation）〉は当然のこと、〈魂〉だけで産出するとされる〈感情（sentimentやaffection）、

情動（émotion）や情念（passion）すら生じないといえることにあると、そして一に、〈感覚〉からもたらされる〈感情〉、情動や情念は、むろんこの〈感覚〉と関与させられるからして、これらはすべて、〈質料、空間、時間を含ま〉せないどころか、〈思惟〉を〈逃亡〉させはしないことにあろうと。

V

以上から、論をさらに進めるに繰返してでも確認せねばならぬは、ヴェーユに読み取り得る「〈魂（l'âme)〉と身体との関係」にあって、まず、例の〈感覚〉や〈感受性〉のそれぞれをして「〈魂（l'âme)〉から身体へ」や「身体から〈魂(l'âme)〉へ」と各伝達せしめる関係が示されていたことに、次に、〈感覚〉や〈感受性〉にも、おのおのの能力からはじまり、各〈感情〉、各情動や情念へという「移動（展開)」が窺えたことに、しかし〈感受性〉に立って語るならば、〈感受性〉は、〈感覚〉がこの能力から出発し、〈感情〉、情動や情念へと「移動（展開)」する際、なかでも情動や情念に対する、身震いの表現になろうか、周知の「武者震い」や「鳥肌が立つ」などを生じさせはしないにちがいないことに、そして、〈感受性〉は、〈感覚〉が何らかの身体（諸器官）（五官）を活用させては、たとえば音楽を聴いたり、絵画を見たりしてもたらされよう各〈感覚〉の〈質〉ならびにその「移動（展開)」した各能力の〈質〉の量をではなく、神経や血管を通る「神経伝達物質」などの各運動である〈量〉ならびにその「移動（展開)」した各能力の〈量〉の量をあらわすことに、かつ筆者にすれば、〈心身（身心）合一〉を現実にさせる、唯一の能力になるといい得ることにあった。だから筆者は〈魂（une âme)〉（ここは〈魂〉全体をさす〈l'âme〉とは表記されない）に受け入れられた、例の〈世界の美〉を捉え得るのが〈感受性〉であり、この〈感受性〉は彼女にとって、〈世界の美〉に対応する能力でしかなくなるように思えるわけだが、しかし多くの人たちにいまだ一般的な語として流布されると認められないせいか、〈世界の美〉は、〈感受性〉によって接触させられる、当の対象であるといい切れるのでもなくば、そのうえ〈魂（une âme)〉の他の能力（感覚）により生み出されるとみられるのでもなくば、およそ〈感受性〉から発展（展開）しよう〈感情〉、情動や情念のいずれかに、なかんずく〈感情〉能力にかかわらせて受け取られる以外になくなろう。今日

ですら周知されないとみえる〈感受性〉がゆえに、こうした〈世界の美〉だけではなく、かの〈不幸〉もまた、彼女にとってこの〈感情〉能力として理解されるも仕方のないことであったにちがいない。

ところで筆者は、前段に記しおいた〈世界の美〉や〈不幸〉をはじめ、さらに〈感情〉、情動や情念などの諸単語をそれとして取り上げてきたにせよ、それでも諸単語自らがそれと名乗り語るのでないといえるならば、諸単語はもとより〈理性〉ないしは〈知性〉における〈思惟〉の働きからもたらされるであろうことを、要は〈世界の美〉や〈不幸〉のそれぞれをヴェーユにそう名付けさせたり、あるいは彼女を除く人たちにあって、このおのおのを〈感情〉（情動や情念）の能力に与させたりし得るとして各判断する〈思惟〉も〈理性（知性）〉の一役割にすぎなかろうことを、加えて〈理性（知性）〉はその作用をして、彼女にいう〈魂（l'âme）〉で働きかけ受容される（これは〈魂（l'âme）〉中の一部位〈魂（une âme）〉にて可能となる）対象（〈世界の美〉や〈不幸〉）を分析的に処理せしめる能力、かつ論理的に〈思惟する〉に欠かせない能力であったろうことをここで再度確認する必要がある。しかして〈理性（知性）〉は、〈魂（une âme）〉で働きかけそこに受容される能力によって捉えられた現実（対象）に向けて、〈思惟〉を駆使させるとて、その現実（対象）すべてを完璧に理解し得ないと知らされるならば、人間の生来持つ諸能力のなかでどれほど称賛に値する能力であるか定かにできないであろう。彼女によれば、〈理性（知性）〉は〈魂（l'âme）〉中の他の部位〈精神（un esprit）〉（筆者にいう大脳皮質）を出所にするとされるし、そこには、現実（対象）に働きかける〈能動〉能力とその産出された〈受動〉能力が、すなわち〈思惟する〉能力（かのデカルトの言を借りて具体的にいうと、〈思惟する〉は〈疑う、理解する、肯定する、否定するなどを含む〉とその〈思惟〉（懐疑、理解、肯定、否定など）能力、〈意志する〉能力とその〈意志〉能力、〈想像する〉能力とその〈想像〉能力、〈創造する〉能力とその〈創造〉能力や〈記憶する〉能力とその〈記憶〉能力が見受けられるように思われるが、しかし〈魂（l'âme）〉中のあらゆる能力に優先し行使されるのでもなく、また〈理性（知性）〉自身が目的とみなされるのでもなく、それ自身に先行しよう現実（対象）を言語によって露にさせる、その〈手段として〉役立つ能力に位置づけられるにほかならなくなる。要は例の〈世

界の美〉や〈不幸〉なる各現実（対象）を〈理性（知性)〉に伝える能力が疾うに〈魂（une âme)〉に見出されていないのでは、この能力に基づきなおも発揮されんとする、その〈思惟〉によって、繰返すが、〈世界の美〉や〈不幸〉と各命名されたり、それぞれをさらなる分析にかけたりすることは不可能になる。それに〈精神（un esprit)〉に在るとした〈理性（知性)〉は、何らかの目的（対象）をみつけようが、それに達する、当の能力とはならなかったのだから、その現実（対象）をして実際に〈魂（une âme)〉をのみか、身体を動かしめる〈運動〉能力とみなされることも不可能である（確かに〈理性（知性)〉での〈思惟〉さえ〈運動〉によりもたらされども、それはたんに〈精神（大脳皮質)〉内だけの〈運動〉にすぎなかった)。またここに記す「現実（対象）をして実際に〈魂（une âme)〉をのみか、身体を動かしめる〈運動〉能力」は、〈理性（知性)〉の〈思惟〉に「先行する現実（対象)」と直接接し得る能力なのであり、この能力は彼女にいう〈世界の美〉の場合、「〈魂（une âme)〉で働きかけそこに受容される能力」であった。要するにこれは、彼女にあって、〈感じる（sentir)〉（能動）とその〈感受性（sensibilité)〉（受動）をさすか、多くの人たちにとっては、〈世界の美〉（あるいは〈不幸〉）が〈再び感じる（ressentir)〉（能動）とその〈感情（sentimentやaffection)〉として受け取られるかにあった。そこで筆者はこのいずれに立つのかになる。〈世界の美〉の方は〈魂（une âme)〉にかかわる、〈感情〉能力でではなく、〈感受性〉で捉えられると断じる。なぜか。およそ〈感情〉は〈魂（une âme)〉に突如生じたりはしない、つまり〈感情〉は彼女の場合、〈感受性〉を経由させずに、〈感情〉に展開されなかったからである。したがって現実（対象）に関係しよう〈魂（l'âme)〉（内）において、何より、〈魂（une âme)〉の部位で生み出される能力〈感受性〉が先きであり、そこから〈精神（un esprit)〉の部位へと伝達されるのであり（伝達可能であるは筆者のみるところ、その〈理性（知性)〉による〈思惟〉がそこに伝わらんとする〈感受性〉を拒否（否定）するか以外の、またはそこで〈感受性〉によって、〈思惟〉が〈逃亡する〉か以外のときになる)、この逆にはならないことをもって、〈魂（l'âme)〉全体の機序（しくみ）とみなし得るのだ。上記していた「〈感じる〉とその〈感受性〉」に関したことで今一度確かめおくべきは、〈魂（une âme)〉には以上の能力のほか、〈感覚する（sentir)〉能力

とその〈感覚 (sensation)〉能力が組み入れられることにあった。だが〈感じる〉とその〈感受性〉は、〈感覚する〉とその〈感覚〉のように、〈魂 (l'âme)〉を構成する一部位〈精神 (un esprit)〉に配置された「記憶」能力と結びつくことはなかったし、そのうえ〈感覚する〉とその〈感覚〉や〈感じる〉とその〈感受性〉が、さらに〈感覚する〉と〈感じる〉の〈能動〉能力や〈感覚〉と〈感受性〉の〈受動〉能力がおたがいに混交するがごとき関係などはみられなかったことを知っておかねばならない（要は〈感受性〉はいわば独立した能力なのである)。かつ〈魂 (une âme)〉でのみ産出されるという〈感情〉、情動や情念のそれぞれは、一方で〈感覚〉から出発して展開された能力と語られることにはもはやなく、〈感受性〉によるのであり、しかもこの能力に立ったところでの〈世界の美〉や〈不幸〉のことなしに生じないとみえるとともに、このおのおのを〈理性（知性)〉で、要は彼女の〈思惟〉で名付けたり、打ち出させたりするはのちのことでしかなかったわけである。

さらに〈感受性〉について言及せねばならぬは、前記もしたことで分かると思われども、あの〈世界の美〉が〈魂 (une âme〉の〈感受性〉で受け取られるといえたほかに、だからこの〈世界の美〉にではなく、〈不幸〉に対応しよう〈感受性〉が何より先きに、〈魂 (une âme)〉によりも、身体に生じるとみることにある。かかる証明を筆者なりに試みるにあっては、上記してある「身体に生じる」〈感受性〉とはおよそ何を示唆させたかを今一度確かめおく必要がある。その〈感受性〉は「身体を動かす」ことでしか、要は身体が今まさに〈運動 (行動)〉していることでしかもたらされないし、成り立つことではなかった。こうしたことであるならば、〈運動（行動)〉自体が〈感受性〉であると筆者ですら断じてかまわぬであろう。だから身体の〈運動（行動)〉すなわちこのもうひとつに相当する〈感受性〉も既出語でいう「動の行動」の主役たるに等しいことを含意させようが、しかしヴェーユに従えば、「日常（不断)」(の生活）での身体の〈運動（行動)〉だけをさすのではなかった。むろん、「日常（不断)」(の生活）において、身体が静止していても（静止とは〈運動（行動)〉が、要は「動き」がみられない謂である)、身体（諸器官）(五官や内臓）はつねに「動き」続けているからして、その「動き」さえ〈感受性〉と呼び得るといえよう。だが身体の「動き」が「日常（不断)」(の生活）でときに伴なわれ

る際は、この「動き」たる〈感受性〉は静止した場合と多少の異なりをみせるはずである。鼓動のことを例にしていうと、静止のときよりか、少しは心臓（の「動き」）が早まり高鳴って胸に響いてはこないか。しかり。ましてや彼女が自らに、女工体験や農業体験での肉体労働を課していたにあっては、筆者ばかりでなく、誰もがこれ以上にない、過酷で激しい、身体の「動き」に襲われもしたと予想できる。

そこで上記した語「(肉体) 労働」のことに付記せずにおれぬは以下のことになる。水産漁業分野での労働のことはともかく、鉱工業や農林業分野の各労働において、なかでも第二次世界大戦が真近かに迫った時期での軍事や生活の各物資調達のためかも筆者に分からねど、ヴェーユが一労働者として関係する工業と農業において、あれほどの、精神的肉体的苦痛を味わされる、1934年冬から1935年夏にかけての、三企業での工場労働を体験していたにとどまらず、彼女は工場体験後の1936年の一時期に、要はスペイン戦争に参戦する以前の一時期に、ならびに前号で触れた、1941年の二度に亘る時期に、何ゆえ農作業の体験までをも試そうとしたのかである。こうした「労働」に窺えるは工業労働者はむろんのこと、農業労働者にとってさえ、「日常（不断)」(の生活）では経験しない、彼女にいう〈魂（une âme)〉(これがときに視床（下部）にみなされると、脳（身体の一部）に受け取られもする）の「動き」になるばかりか、この〈魂（脳)〉以外の身体にあっては、その「身体を動かす」〈運動（行動)〉が課せられることにほかならなくなろう。したがって以上から、「労働」に関した、筆者なりのひとつの答えが導き出せる。すなわち、わたしたちの世界で「現実（対象)」にすべきは「労働」であり、「労働」は同時に筆者に繰返し記された語〈運動（動き）(行動)〉に等しくならざるを得なくなるし、かつわたしたちは「労働」の試みをたえず（つねに）でなくとも、「日常（不断)」に課す用意のあることを心しておかねばならぬと。しかし何ゆえにか。これは以下に述べる、彼女の主張に窺える。彼女は晩年（1942年）の作品『キリスト教と農耕生活』で、〈On dit que le travail est une prière（労働は祈りであるということだ)〉(7) と語っていたように、〈労働〉を〈祈り〉たらしめねばならぬことを、とどのつまり〈労働〉すなわち〈祈り〉でなければならぬことを強調した。さすれば彼女のキリスト教に対する理解は、あの修道院制度の創始者ベ

ネディクトゥス（Benedictus）（480-543）（彼は従来の瞑想的（観想的）修道生活よりも家族的（社会的）修道生活をめざしたとされる）の戒律または彼の名にちなむ修道会の会則でもある《Ora et Labora（祈り働け）》[8]に同意させられると読み得るか。否である。なぜなら、紀元後６世紀当時の修道士たちの《働け》とされる〈労働〉はたとえば写本をはじめとする手作業（これは手（家内）工業のことを示唆させはしない）のほかに、小麦や葡萄栽培などの農作業にもっぱら従事しては、農作業で収穫する糧をば修道士たちの生活に役立たせるとともに、その作物の作り方を修道院周辺に住む農民に教え普及させることにもあったからである。農民への指導のことはこれ以上問わずとも、この戒律（会則）《祈り働け》は〈祈り〉や〈働け（労働）〉を接続詞（et）で結びつけたにすぎないとみえるからして、筆者が彼女の上記引用文から読むごとき「〈労働〉すなわち〈祈り〉」になり得ないだけか、修道士たちの修道（修行）にとって、〈祈り〉が主になければならぬことでは、〈働け〉が〈祈り〉の勤めのための〈労働〉であり、主なる〈祈り〉に比べ従にしかならない関係にあるように聞こえてくる。こうした戒律（会則）の謂に相違すると彼女の引用文にみる「〈労働〉すなわち〈祈り〉」は、〈労働〉に等しく〈祈り〉を宛がうかぎり、その〈労働〉をして、それでも一方の修道院のことでなければ、他方のローマ教会を中心に成るキリスト教の思想たらしめられるか否かについて確かめおかなくてはなるまい。思うに、まず、《祈り働け》は紀元後9世紀にはヨーロッパ中の修道院に取り入れられたにもかかわらず、次第次第に地方の統轄者たる領主がその修道院を支配するに従い、彼女の引用文での主張が日の目をみなくなるはむろんのこと、当の《祈り働け》の目的である精神（神への奉仕）すらも見失われていったと。これこそ戒律（会則）の世俗化である。そして、修道院が領主と結びつくことで、このように世俗化された（いくつかの修道院が10世紀から13世紀にかけて、その改革運動を試みたというが）と同様な、いやそれどころか徹底した世俗化を推し進めたは、ローマ教会であったと。イエス・キリストの生誕と十字架刑から、およそ紀元後１世紀までの原始キリスト教（または使徒）時代（70年間）のことはまだしも、古カトリック教会（または教父）時代とされる、その1世紀以降、ローマ教会はキリスト教をローマ帝国に広めるうえか、それともローマ帝国の事情かも重なって、国教にならざるを得なく

なり（国教化は392年）、生前のイエスの教え（たとえば神はわたしたちの身近かにいる父なる存在との教え）に比べ、その変質を余儀なくさせられていた。これをば以下に述べるように、ローマ教会自身の世俗化の一といわずして何と呼べるか（身近かにいる父のような存在の神は世俗的観念ではない）。要するに古カトリック（ローマ）教会は当時、ローマ帝国内で増えに増えた信仰者に対応し、彼らをローマ教会自らに新たに組織させる職制（法皇（教皇）（Papa）も教父を代表する、その一例である）のもとに統制さすごとき諸制度を設けていたと、換言するとローマ教会はさらなる国教化によって、ローマ帝国内の民衆にとどまらない、あらゆる階層の人たちをローマ教会の、形式的にであろうがなかろうが、成員すなわちキリスト教徒として容認するほかなかったといえるからである（ちなみに上記していた修道院に対し、何ゆえローマ教会のことが付加されねばならなかったかは時間（歴史）的に、修道院が、修道院よりも先きに世俗化するローマ教会への反動として発足したことにある。つまりローマ教会は古代ローマ帝国の時代に、キリスト教が国教化されて以来、古代に続く中世（５世紀から15世紀）において、たとえばフランク王国やフランス王国を筆頭にする、西欧諸王国が打ち立てられるなかで、その諸候を超えんとする、いわば世俗的権力をめざし獲得したことへの、修道院の反動であるとここで確認しておく必要がある。しかしてその修道院も世俗化からの脱却を図るべく、創立の精神（神への奉仕あるいは服従、純潔、禁欲）に立ち返る改革に乗り出していたことはすでに本文で触れた通りであるが、一方のローマ教会がどうであったかといえば、近代の幕開けとなり、フランスではルネサンス時代と呼ばれた16世紀に、プロテスタント（新教）を標榜したルターやカルヴァンの登場による改革に促されてのことか、カトリック（旧教）内でイエズス会を立ち上げたイグナチウス・デ・ロヨラの改革を待たねばならなかったとされよう）。

ときの政権とかかわり、自らが権力の座にしがみついては、世俗化を逃れられないローマ教会は果たして、例の《祈り働け》を現実にさせているのか（かの法（教）皇は自ら率先して労働に従事しているのであろうか）。たとえば、筆者が前号で「労働（働け）は宗教の主題になじまない」と述べた通り（主題はこの場合当然《祈り》である）、また前記した、ヴェーユの作品『キリスト教と農耕生活』にみられる通り、すなわち、

Les dimanches où le travail trop pressant empêcherait les fidèles d'aller à l'église, le curé irait dans les champs y faire réciter cette prière et un Pater. Ainsi les paysans n'auraient pas le sentiment qu'il y a concurrence et hostilité entre le travail et l'église. (9)

日曜日に非常に緊急な仕事を抱えてしまい、信徒（たち）が教会に行けなくなるときには、司祭が畑に行き、そこでこの祈りと「主の祈り」を唱えさせるとよい。そのようになれば、農民（たち）は労働と教会のあいだに、争いや敵意があるという感情を持つことがないであろう、と。

上記引用文にとって、〈仕事〉や〈労働〉と訳す際の原語がいずれも〈travail〉であり、〈信徒（たち）〉がこの場合〈農民（たち）〉をさすは当然としても、〈この祈り（cette prière)〉と記された語句が何を示すかは、実は上記引用文直前の段落に従うほかなくなる。しかし筆者は前段落（の文章）すべてをではなく、〈この祈り〉にかかわると思える一部を取り出し照会するにとどめる。すなわち、

Chaque dimanche, le curé et les fidèles ensemble, nommant les travaux en cours, demanderaient à Dieu de les bénir comme devant servir à donner de la chair et du sang, ...et d'accorder aux travailleurs de les accomplir dans un esprit de patience, de sacrifice et d'amour. (10)

日曜日の度に、司祭と信徒（たち）はともに、その間従事している労働の名前を唱えながら、労働が...血と肉を与えるに役立つべきこととして、労働を祝福するように、かつ労働者（たち）が忍耐の、犠牲の、愛の精神をもって、労働をやり遂げ得るように、神に願う、と。

最初に用いた引用文のあとの本文に記したことと同様に、ここもまずは二番目の引用文の訳で一つ注意することを述べておく。それは〈労働者（たち)〉

とした訳のことである。筆者が思うに、〈労働者（たち）(travailleurs)〉にとって、ヨーロッパでキリスト教を信仰する人たちでもあるならば、〈信徒（たち)〉になろうし、それが最初の引用文では〈農民（たち)〉であると、つまり筆者は後者にいう彼らを農林業関係の労働者と前記したほか、〈労働者（たち)〉には水産漁業関係や鉱工業関係の各労働者をはじめとする、あらゆる職種の人(労働者）たちが含まれるとみた。しかし筆者はここで、「あらゆる職種の人（労働者）たち」と記したうち、たとえばフランス革命以前の階層である、国王ならびに第一（聖職者)、第二（貴族）の各特権身分と第三身分（なかでも上層ブルジョア）を除く人たちを質す対象にし、しかもその人たちは〈信徒〉である〈労働者（たち)〉とみなされる以上、彼らの〈労働〉が筆者の主張する「(労働すなわち）祈り」であるか否かを上記二引用文から確かめておかなくてはならない。このことは同時に、最初の引用文で問いとして取り上げた〈この祈り〉に答えられるだけでなく、さらにそこに〈労働と教会〉と書かれるにあって、ここでいう〈農民（たち)〉の〈労働〉は彼らからみて、〈司祭〉要は〈教会〉にいかに映じていたかに答えられることになる。ヴェーユがかのとき手伝った農作業（あるいは工場労働）は個人的体験にすぎなかったにせよ、その体験から彼女に語らせよう、〈農民（たち)〉(あるいは工場労働者たち）の〈労働〉も〈祈り〉でなければならなかったのである。とりわけ二番目の引用文については以下に少しずつ説明が加えられるが、筆者にすれば、それは〈祈り〉に関する、彼女の望み願いが、または理想が綴られるばかりか、彼女の農作業（あるいは女工）体験後に自らに〈思惟〉させ編み出された思想の一となる文章にちがいなかろうと思われる。ところが最初の引用文に目を通しては、彼女の望みや理想がこの現実と相違することに気づかされる。つまり、〈司祭が畑に行き、そこでこの祈りと「主の祈り」を唱えさせる〉ならば、〈農民（たち）は労働と教会のあいだに、争いや敵意があるという感情をもつことがないであろう〉と書かれるかぎり、〈司祭〉は〈教会〉外で〈この祈り〉と「主の祈り」を唱えることがないとみえるからして、〈司祭〉もしくは〈教会〉は〈農民（たち)〉(あるいは工場労働者たち）の〈労働〉を〈祈り〉になるとは理解できてないと指摘せざるを得なくなる。だからかつての、また現今の〈教会〉には、あの修道院に窺えた《祈り働け》の会則のなかの《働け》が広まらず、届かなかっ

たし、修道院の会則の《祈り》とも別の〈祈り〉であったやも知れぬといわねばなるまい。彼女が記し、筆者が問う〈この祈り（cette prière)〉という語句の指示形容詞は一言にして示せば〈神に願う〉を受け、全語句では〈神に願う祈り〉となろう。だが何を〈神に願う〉のか。この「何を」は察するに〈労働〉を充当させるほかなく、しかも二番目の引用文中の、その上記した〈神に願う〉にかかる語句が、つまり〈血と肉を与えるのに役立つ〉〈労働〉や〈忍耐の、犠牲の、愛の精神〉に貫かれた〈労働〉が適当しているのだ。ここで彼女の〈労働〉に関する主張から、筆者なりの、その結語を述べおくと、筆者が〈この祈り〉要は〈神に願う祈り〉に等しいとみた〈労働〉は、〈神〉より人間に原罪としても受け入れずにおれなくなる賜物であり、人間が〈神〉の領域へ到達できる、唯一の方法となることにある。だから彼女にいわせよう〈労働〉は〈神〉のもとにある〈労働〉でなければならぬのであって、労働者自らの好悪や都合不都合により選別されたり、ましてや資本主義下の企業経営者のや、社会主義共産主義（彼女に従えば国家資本主義）下の共産党の各利潤をめがけたりするためだけの〈労働〉ではならないと。〈神〉のもとの〈労働〉はこの〈労働〉をば〈神に願う〉ことであり、〈祈り〉であることになる。しかして再度指摘するまでもないが、〈労働〉の主体は労働者（人間）にあって、その〈労働〉をいかに仕上げるかを人間に〈思惟〉させる、彼女にいう〈魂〉（〈思惟〉は〈魂〉の一部位〈精神〉で可能になった）も欠かせなくなるにしろ、それよりか、「日常（不断)」以上に、手足をだけでなく、内臓全体を「動かす」身体に求められなくてはならなかった。そしてこの「日常（不断)」にみられない「身体を動かす」〈労働〉は筆者に、〈運動〉や（その）〈量〉の各語に等しく置き換えさせたし、こうした〈労働〉すなわち〈運動〉（その）〈量〉をして、彼女にいう〈感受性〉に換言し得る語たらしめると断じもさせた。

さすれば〈労働〉すなわち〈運動〉（その）〈量〉〈感受性〉と記しおいた、当の語はいずれも何を意味させるかであろう、それはしかし、わたしたち人間が「日常（不断)」気づかないにしても、それでもたえず〈運動〉している身体（諸器官）（五官や内臓）の各作用をして、またたとえば散策（運動）したり、食物を取ったりすれば、人間はこの身体（諸器官）のいずこの作用から、身体が熱を持つ（熱くなる）ことを経験せども、およそ〈感覚〉としての「熱」を

して、「当の語」に当てはめさせるのではない。そうでなければ、筆者が念を入れてもう一度質し確かめてみるべきは、前記した、ヴェーユの二引用文のどちらかにあって、〈感受性〉を含めた、「当の語はいずれも何を意味させるか」に該当しよう文章や語句を見出せるかどうかにあろう。すると筆者は、彼女に〈労働が…血と肉を与えるのに役立つ〉（二番目の引用文）と語られた文章を気にかけないわけにゆかなくなる。これは思うに、身体（諸器官）の「日常（不断）」の〈運動（動き）〉のうち、たとえば生きている証したる「心臓」の〈運動（動き）〉もみられると述べてきたが、こうした例に比して、ここにいう〈労働（運動）〉は、その身体（諸器官）（五官や内臓）に、さらにいえばこれらに関係する血管や神経各内部に、何かが生じたことを明らかにしてくる。だがこれを以下で論証していく前に、注意することは、〈労働〉〈運動（動き）〉（という表記）に関してである。つまり筆者が付加させた「血管や神経各内部」での〈労働（運動）（動き）〉さえ当然のことながら、他人の目にも分かるごとく、ある人が実際「身体を動かす」〈労働（運動）（動き）〉をすることに伴なって生じくることでしかない。だからこれも当然のこと、ある人が彼女にいう〈魂（l'âme）〉で何かを〈感じ〉たり、〈思惟〉したりすることも（〈魂〉の）〈労働（運動）（動き）〉とみなされ得るが、しかし他人（の目）にはある人の〈魂〉の〈労働（運動）（動き）〉がみえないと同時に、何を〈感じ〉〈思惟〉しているかも分かるはずがないと思えるがために、こうした〈魂〉における〈労働（運動）（動き）〉のことよりか、誰にも実行されると分かる、身体での〈労働（運動）（動き）〉が優先し質されねばならぬと、かつ筆者はそのもとでの、ある人を除き誰にも分からぬ、（ある人の）身体（諸器官）（五官や内臓）はもとより、これらに関係しよう「血管や神経各内部」の〈労働（運動）（動き）〉が取り上げられねばならぬとみた次第なのである。そこで繰返してでも語る必要があるは、身体（諸器官）（五官や内臓）にはりめぐらされた血管（毛細血管も含ませる）や神経各内部における〈労働〉〈運動〉（その）〈量〉〈感受性〉は「日常（不断）」の、生命または健康を維持する意味での正常ないずれでもなかったということである。要はいずれもが「日常（不断）」のこのどれかより増したとみえることにある。たとえば「神経」（内部）に関する、そのいずれにあってさえ、すでに一見した通り、「神経」内部を伝わるにちがいない、「日常（不断）」

の「神経伝達物質」が増すこと（増すことには新たな「神経伝達物質」が生じることもあり得る）を、すなわち「増す」とは「神経」内部が〈労働〉〈運動〉（その）〈量〉〈感受性〉でもって激しくゆさぶられることを示唆させずにいないのだ（「神経伝達物質」は自然科学的あるいは今日にいう生命科学的表現であり、他は人文科学（哲学）的表現であろうが、彼女の哲学は自然科学や生命科学への造詣が深いと認められるかぎり、その人文科学だけにとどまるのではなかろう。彼女が生命科学に通じるは、父親が医者であったことによると、さらにのちの問題として触れねばならぬが、彼女自身が終生頭痛に苦しめられていたことによると思われる。そしてこの後者のことは筆者に、彼女が何ゆえ、他の哲学者たちにみることができない、要は独自の〈感受性〉を持ち出し強調したかの因であると断じさせる）。だから上記中の、「〈労働〉すなわち〈運動〉（その）〈量〉〈感受性〉と記しておいた、当の語はいずれも何を意味させるか」や、この〈労働〉（の語）を筆頭にするいずれかによって、「その身体（諸器官）（五官や内臓）に」、「これらに関係する血管や神経各内部に、何かが生じた」と述べた各「何」に対し、筆者は「神経伝達物質」と答えるほかなくなるわけである。それゆえ以上を〈感受性〉に代表させて再度換言するにしろ、〈労働〉すなわち〈運動〉（その）〈量〉（あるいは〈量〉の〈量〉）である〈感受性〉はまた「神経伝達物質」のことも示唆させるに変わりがないほか、〈受動〉能力たる〈感受性〉の発生はあの〈感覚〉がもたらされる際と同じように、身体（諸器官）（五官や内臓）のいずれか（むろんこれらに関係しよう神経や血管も含まれるとする）を共有（利用）するにあり、このそれぞれにおいて、たとえばここで取り上げている〈不幸〉と捉えられる対象に、身体（諸器官）（五官や内臓）の各〈能動〉能力すなわち彼女のいうところの〈感じる（ressentir）〉を働きかけることによった。さらに〈感受性〉が「神経伝達物質」であると指摘できたは、「神経伝達物質」が身体（諸器官）（五官や内臓）を駆け巡るごとく伝達されると述べた以上、これらにかかわる各神経や血管のことを問い質さずに、しかもその各「内部」を通ることを示さずに、〈感受性〉すなわち「神経伝達物質」と断じた、筆者の主張はなぜかのままで終始し（だからこれが証されれば、「彼女の哲学はその人文科学だけにとどま」らないとみた謂になろう）、上記した「神経や血管（各内部）」以外の何をもって、「独自」である〈感

受性〉といえるかが明かし得なくなるからである。そして身体に産出される〈感受性〉すなわち「神経伝達物質」は神経や血管を伝わり流れては（いずこからいずこへは後述する）、循環するためもあってか、身体から〈魂〉にまで導かれ続けられなければなるまい。また上記した〈感じる〉ことは、つまり身体（器官）が個別で、もしくは複数（の器官）で働きかけるか（複数の場合同時にか否か）は分かりかねるが、それ自身〈感じる〉ことは筆者にとって、身体（器官）が作動する以外の何ものでないことを含意させる。換言すると身体がそれ自身を動かすことは、身体が〈感じる〉ということである。身体（諸器官）（五官や内臓）が動いていることは、当然「日常（不断）」のことであって、彼女にすれば、これも〈感じる〉こととして理解されるだけか、あの激しくも「身体を動かす」際には、身体の何らかの器官さえ「激しく」〈感じる〉ことに注視せずにおれなくさせられたのである。そして疾うに触れた通り、この〈能動〉能力〈感じる〉に従い、〈感じ〉られる〈受動〉能力〈感受性〉が「日常（不断）」のときや「激し」いときも生じることになる（他方これも指摘済みの、彼女にいう身体の〈能動〉能力〈ressentir〉とその〈受動〉能力〈sensation〉の場合、筆者は前者の語を〈感覚する〉と、後者の語を〈感覚〉と各訳しおいたが、両者のそれぞれを生理学や心理学の各分野では、刺激と反射（反応）と表現するは周知のことであろう。彼女は自らの作品中にときに〈刺激〉と〈反射（反応）〉の各語を使用したとて、いまだ〈感じる〉とその〈感受性〉をでなしに、〈感覚する〉とその〈感覚〉をしか認めはしない各分野また世間にあっては、この「刺激と反射（反応）」が筆者にはもっぱら〈感覚する〉とその〈感覚〉のための用語に見立てられるほかないように思われる。だから「身体を動かす」ことなくば、その身体（諸器官）（五官や内臓）にかかわろう神経や血管に、さらにこの神経や血管各内部に、〈労働〉すなわち〈運動〉（その）〈量〉（あるいは「激し」さを最大にさせた表記では〈量の量〉）〈感受性〉「神経伝達物質」は生じないといわねばならないわけである。かつ筆者が思うに、「身体を動か」しさえすれば、ここでとくに話題にした、この身体における〈感受性〉すなわち「神経伝達物質」はそのおのおのを神経や血管（各内部）に対し、「正（プラス）」よりか、「負（マイナス）」の因子に相当させて、例の〈不幸〉（苦しみ、不快）とかかわらざるを得なくしようと筆者に捉えられた（一方〈世界の美〉（歓喜、快）

と関係するは、〈魂〉における、その〈感受性〉すなわち「神経伝達物質」であり、このそれぞれは〈魂（脳）〉の神経や血管（各内部）に対し、「正（プラス）」の因子に相当させられた）といえる。だがここでは以上にとどめ、たとえば〈感じる〉を含める〈感受性〉すなわち「神経伝達物質」が何ゆえ「負」や「正」にみられるかなどはのちに明らかにする。

註

(1) 前著とは『ヴェーユとサルトル』（2012年８月発行）であり、前号とは「ヴェーユ感受性研究①」（「欧米の言語・社会・文化」、新潟大学大学院現代社会文化研究科、第19号、2013年３月）である。

(2) 以下に前号（Ⅲ）表と（Ⅳ）表を利用し、〈不幸〉の単語がいかなる作品にどれほど使われているかを記しおく。その際一に、N°は各表内の作品年代順の番号をあらわす、一に、刊行された単行本はそのタイトル略号文字で示す（例〈AD〉とは《Attente de Dieu》（etc）これらは前号参照のこと）、一に、単行本の頁数に続く括弧内数字は単語の頁内における頻度をさす。かつ次なるまとめはこの上記した順序に従うこととする。

（Ⅲ）表において

N° 3 〈VS〉 P.14
N° 29 〈OL〉 P.38
N° 37 〈OL〉 P.61, P.84, P.85, P.152
N° 39 〈CO〉 P.98, P.104
N° 47 〈CO〉 P.135
N° 49 〈CO〉 P.145
N° 54 〈SG〉 P.57, P.58, P.61, P.62(2)
N° 57 〈SG〉 P.63, P.72(2)
N° 61 〈CO〉 P.166
N° 64 〈EHP〉 P.249
N° 73 〈EHP〉 P.337
N° 77 〈VS〉 P.24
N° 85 〈EHP〉 P.321
N° 92 〈EHP〉 P.287(2)
N° 93 〈EHP〉 P.279
N° 95 〈EHP〉 P.107(2), P.112
N°100 〈EHP〉 P.301
N°104 〈EHP〉 P.25, P.26, P.27(2), P.28(2), P.34(2), P.42, P.43, P.46(3), P.47
N°105 〈SS〉 P.231, P.232, P.240, P.241
N°107 〈VS〉 P.44, P.45, P.103
N°108 〈SG〉 P.78, P.101, P.102, P.115, P.117(2)
N°109 〈SG〉 P.14(2), P.22, P.26, P.29(2), P.34, P.36, P.37(2), P.39(2), P.40(2), P.41
N°110 〈CI〉 P.12, P.41, P.42, P.50, P.53, P.56, P.58(2), P.73, P.75, P.76, P.93(2), P.94, P.95(7), P.96(10), P.111, P.113, P.136(2), P.161, P.165, P.203, P.209, P.218, P.226(3), P.234, P.239(2), P.243, P.266, P.272(6), P.274(3)

〈CⅡ〉 P.20(3), P.22(2), P.23(4), P.25(2), P.26(6), P.27(4), P.30, P.46, P.68, P.82(3), P.86, P.87(2), P.96(4), P.103, P.106, P.111, P.112(5), P.114, P.121(3), P.127(2), P.130(3), P.138(2), P.147(5), P.150(3), P.152(2), P.154(2), P.157, P.158, P.159, P.163, P.170, P.171(6), P.172, P.176, P.178, P.180(5), P.182, P.183(6), P.184, P.192(3), P.199(3), P.201(6), P.203, P.205, P.219(2), P.220(4), P.221, P.223, P.233, P.246(5), P.248(7), P.251(5), P.252(3), P.261(4), P.266, P.277(4), P.290, P.304(2), P.337

〈CⅢ〉 P.13, P.15, P.28(2), P.34, P.39, P.50(3), P.54, P.72, P.87(2), P.108, P.111, P.151, P.212, P.214, P.216, P.219, P.238, P.274, P.288

N°112 〈CO〉 P.263(4)

N°114 〈IP〉 P.16, P.17, P.38, P.45(2), P.46, P.55, P.56, P.62, P.72, P.77(2), P.92, P.94, P.95, P.97(2), P.102, P.104, P.105(3), P.127, P.144, P.145, P.148(5), P.157, P.164(2), P.167(3), P.168(5)

N°116 〈SG〉 P.151

N°125 〈SG〉 P.44, P.45

N°126 〈PSO〉 P.32(2)

N°127 〈PSO〉 P.35, P.36

N°130 〈AD〉 P.97

N°131 〈PSO〉 P.85(6), P.86(4), P.87(8), P.88(5), P.89(7), P.90(4), P.91(10), P.92(4), P.93(4), P.94(2), P.96, P.101(2), P.104(3), P.107(7), P.108(5), P.111, P.112, P.113(10), P.114(9), P.116(9), P.117(5), P.118(7), P.119(2), P.120(6), P.121(5), P.122(7), P.123(7), P.124(11), P.125(5), P.127(2), P.128(3), P.129, P.130(5), P.131

N°132 〈AD〉 P.125, P.132, P.133(2), P.134(2), P.135(2), P.138, P.141(2), P.142, P.144(2), P.145, P.151, P.152, P.153, P.165(2), P.169(2), P.173, P.174, P.175, P.186(2), P.187(2), P.188, P.196, P.198(2), P.202(3), P.204, P.209

N°133 〈AD〉 P.243

N°136 〈PSO〉 P.75(4), P.76(4), P.78(2), P.80, P.81, P.83(4)

N°137 〈AD〉 P.38, P.41(4), P.42, P.43, P.54, P.62

N°139 〈AD〉 P.69(5), P.70(2), P.72, P.77(2), P.82

N°140 〈CS〉 P.14(3), P.16, P.26, P.27, P.33, P.35, P.36(2), P.39(4), P.40(2), P.42, P.48, P.78, P.85, P.89(2), P.92, P.101, P.104(5), P.126, P.127, P.132(2), P.149(2), P.155, P.166(2), P.167, P.198(2), P.203(3), P.216, P.221, P.223, P.225, P.231, P.246(2), P.258, P.282, P.287(5), P.288(4), P.296(4), P.297(8), P.298(3), P.300(2)

N°141 〈CO〉 P.241(3), P.242, P.251(5), P.252(2), P.258

N°142 〈EL〉 P.185, P.198, P.199, P.210(2), P.213(3), P.214

N°143 〈EHP〉 P.67, P.68

N°144 〈EHP〉 P.78, P.83

N°145 〈LR〉 P.16(3), P.37, P.54(2), P.55, P.68(2)

N°146 〈CS〉 P.306(2), P.307(2), P.312, P.336

N°147 〈EL〉 P.247

N°148 〈E〉 P.25, P.28, P.35, P.52, P.53(6), P.59, P.61(3), P.67(2), P.68, P.72, P.79, P.87(3), P.101, P.106, P.121, P.146, P.149(2), P.150(3), P.151(2), P.152(2), P.154, P.170, P.184(3), P.188(3), P.194, P.196, P.200, P.231, P.232, P.237

N°149 〈SS〉 P.201, P.203

N°150 〈SG〉 P.172

N°151 〈SS〉 P.131, P.142, P.170, P.175

N°152 〈SG〉 P.49, P.50, P.51(2), P.52, P.54, P.55(2)

N°153 〈PSO〉 P.13, P.19
N°154 〈OL〉 P.237, P.239
N°155 〈EL〉 P.28, P.29(3), P.30(2), P.32(2), P.34(4), P.35(4), P.36(3), P.37(4), P.41
N°156 〈EL〉 P.52(2)
N°157 〈EL〉 P.64, P.65, P.68
N°161 〈EL〉 P.99, P.100, P.104(2),P.108
N°162 〈EL〉 P.115
N°164 〈EHP〉 P.374, P.375, P.377
N°165 〈OL〉 P.220

(Ⅳ) 表において
N° 1 〈LP〉 P.108, P.214, P.273
N° 2 〈OL〉 P.178
N° 3 〈SG〉 P.147
N° 7 〈EL〉 P.154, P.158, P.160(3), P.168, P.174(4)

(以上次世代のヴェーユ研究者の資料に資すれば幸いである)

(3) 〈一貫性〉ならびに〈整合性〉という各邦語は、Rees《Simone Weil》(chastel) の〈coherent〉(P.213)、Cabaud《L'expérience vecue de Simone Weil》(Plon) の〈continuité〉(P.9) やDavy《Simone Weil》(Editions Universitaires) の〈cohérence〉(P.6)〈constant〉(P.45) からの各訳であり、各原語を含め、ほぼ同義と解してかまわない。ただし上記研究者たちは、筆者に主張される〈感受性〉によって「〈一貫性〉ならびに〈整合性〉」がみられるとは指摘していない。
(4) 「力」については、既紀要「「力」に関するノート」(新潟大学教養部研究紀要、第16集、1985年) に、また「不幸」をはじめとした、ヴェーユ独自に用いるとみられる、いくつかの単語については、既紀要「シモーヌ・ヴェーユの諸作品における語彙」(新潟大学教養部研究紀要、第19集、1998年) にまとめみた。
(5) GRAND LAROUSSE DE LA LANGUE FRANÇAISE 1 (Librairie Larousse) P.48
(6) 『新明解国語辞典』(三省堂) P.377
(7) Simone WEIL《Le christianisme et la vie des champs》(Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu) (Gallimard) P.21
(8) 『岩波キリスト教辞典』(岩波書店) P.P.97-98
(9) Simone WEIL《Le christianisme et la vie des champs》(Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu) (Gallimard) P.28
(10) Ibid., P.P.27-28